「対話とは何かを考えてみよう会」実施報告書

吉田省子
分野横断リスク問題研究会
（北海道大学大学院農学研究院）

日　時　　2024年8月9日（金）13：30 ― 17：15（開場　13：00）
閉会宣言　17：25
会　場　　北海道大学学術交流会館　２階　講堂
主　催　　分野横断リスク問題研究会 （北海道大学大学院農学研究院）
協　力　　核のごみに関する対話を考える市民プロジェクト（第2部の主催・司会）
目　的

1. 市民プロジェクトの意見表明「見解」に耳を傾ける
2. 厄介で面倒臭い問題での対話の場が抱える課題を、意見交換を通して互いに意識し合い、各人の今後の活動や考察に繋げてもらう

参加者　　36名

【用意した第３部テーマ】
対話とは・対話の場とは・ファシリテーション・ファシリテーターとは何か

【参加者　7つの心得】

1. 傾聴
2. 他者を尊重し、貶めたり非難したりしない
3. 相手の言い分は自分の言い分と同程度に価値あるものだと自覚する
4. おしゃべりを独占しない
5. 長いおしゃべりを指摘されたら気持ちよく切り上げる胆力を発揮しよう
6. 些細なことだからと引っ込まずにどんどん質問し、意見を述べよう
7. 言葉や態度をつなげる努力を怠らない

2024年9月23日（月）

分野横断リスク問題研究会　連絡先／吉田省子（世話役）
〒060-8589 札幌市北区北９条西９丁目　北海道大学農学部　食資源研究棟 F304

【当日の実際の流れ】

主催者	主催・進行の分担		目安	内容	
対話とは何かを考えてみよう会	第１部 10分	分野横断 リスク問 題研究会	13:30	開会の挨拶	開催趣旨 参加の心得 進行の確認
	第２部 報告会 ２時間 14分 （休憩 含む）	主催 市民プロ ジェクト	13:40 13:50 14:55	・報告者からの背景説明 ・情報提供・報告 ・呼びかけ ・休憩 ・質疑応答 （質問感想等を書いてもらう） ・コメント	・宮崎汐里（市民プロジェクト代表） ・「対話の場への見解」についての報告 ・質疑応答 回答者　宮崎汐里、 東田秀美（寿都町民の会事務局） 司会者　宮本奏　（きたのわ） 津田光子（きたのわ） ・コメント 川本思心（北海道大学准教授） 平川秀幸（大阪大学教授）
	分野横断 リスク問題研究会		15:54	小休止 場面の転換	
	第３部 意見の 交換会 65分	主催 分野横断 リスク問 題研究会	16:00 15:55 16:58	・書く ・咀嚼／近隣とのおしゃべり ・意見の重ね合いNo.1 誰かの発話→受けて重ねる→ さらに重ねる→・・止める ・意見の重ね合いNo.2 ・意見の重ね合いNo.3 ・コメンテータのメッセージ	・司会/進行 吉田省子（北海道大学） 支援　明田川知美（武蔵女子大学） 郡伸子（名古屋大学） 竹津明（元「農家の友」編集者） 発話・・・・・・・・・・・・止め 視覚化A. 時系列書きとめ（郡） PCでスクリーンに投影 視覚化B. 概念別整理（明田川） ホワイトボード2台 付箋紙 （閉会セレモニーで共有） 平川秀幸（大阪大学）
	閉会セレモニー 20分		17:05 17:11 17:25	・重ね合いの視覚化物の共有 ・閉会に際してのメッセージ ・閉会宣言	B 近くで見る 明田川説明／スクリーンはA 市民プロジェクト／会場参加者 主催者

【到達目標】

1. 第２部　市民プロジェクトの「見解」に対し、建設的な質疑応答の場になっていること。
2. 第３部　テーマに関し各自それぞれの見通しをたて、言葉を重ねあうことができること。

【前口上】

第２部の質疑応答で出た課題を第３部でのテーマに直接接続しなかった／させられなかったことについて、第３部の進行を担当した者として、その理由をまず述べます。

第３部では、どのような対話・対話の場が望ましいか・好ましいか、そしてどういったファシリテーターであったら良いと思うか、といった点を中心に話を繋げる予定だったことが最大の要因です。もっとも、テーマの性格上、第２部の質疑応答であらわになるであろうことにも繋がると推測していました。

なお、第２部はその質疑応答で完結しているという入れ子構造なので、第２部と第３部のそれぞれのファシリテーターは各自の責任を果たし、ファシリテーションする際の公正性や中立性は、会場に来られている参加者の方たちに対し開かれていたと思われる。第三者による検証の目と耳は、会自体の準備期間の短さゆえに用意できなかった。そこで、もし今後何らかの形で第２回「考えよう会」が開催されるとするなら、第三者による検討は課題となる。

＝　簡易報告　＝

第１部

8月1日の第５回特定放射性廃棄物小委員会で「核のごみに関する対話を考える市民プロジェクト」の見解が参考資料にあげられていました。本日の会は市民プロジェクトさんの協力を得ての開催です。地層処分への反対や賛成のコールをするのではなく、何らかの合意形成を図ろうとするものでもありません。私達全員にとってのこの場のルールは、詰問し非難しあう場ではないと理解して互いに向き合おうということです。

目的は二つあり、一つは市民プロジェクトの報告に耳を傾けていただくことです。あたかも公の検証に喧嘩を売っているように見えるかもしれませんが、それは違います。相補的なのだと考えています。もう一つは、厄介で面倒臭い問題での対話の場が抱える課題を、意見の重ね合わせを通して互いを意識し合い、各人の今後の活動や考察に繋げてもらうことです。

第１部の形態をプログラムに載せた主旨説明を読み上げるという形にしたのは、開催に至る経緯や第２部の位置付けをくどいくらいに確認し、参加者全員の共通土台としたかったからです。詳細は後で読んでもらえれば良い、とはできなかったのです（報告書巻末に掲載）。

第２部

「市民プロジェクトによる報告」の要約

第２部は、高レベル放射性廃棄物の最終処分地選定における文献調査の実施自治体である寿都町と神恵内村で行われた「対話の場」について、市民プロジェクトが自らまとめた検証の報告会です。主な論点は、対話の場におけるリスクコミュニケーションの適切性、コミュニケーションの双方向性、地域社会への影響などでした。市民プロジェクトは、専門家の多様な意見が反映されていない、実質的な双方向のコミュニケーションが不十分、地域の分断を助長した可能性があるなどの問題点を指摘しました。今後の対話の場のあり方や、地域分断への対応について問題提起していました。

報告後のQ&Aの要約

Q: そもそも対話の場とは何だろう?
A: 対話の定義は難しく、リスクコミュニケーション研究でも議論されてきた。市民プロジェクトとしては、相互作用的な変容や意見反映を前提とした実質的な対話が求められる。

Q: ファシリテーターとは何か。公正中立に実施するとは何か。誰に対して公正中立であるべきか
A: ファシリテーターの公正中立性については、第3部で議論する予定。

Q: 分断状況を助長した責任の所在を追及すべきか?
A: 地域分断への影響の検証を求めているが、責任の所在を積極的に追及するつもりはない。

Q: 住民の方々から現状に対して「こうすればよかった/こうしたい」という声は上がっているのか?
A: 町民の会では常にそうした話題になるが、広く町民で議論できるまでには至っていない。

Q: なぜ文献調査を受けたのか? なぜ知事は反対しているのか?
A: 分からないが町長の発言から交付金目当てと推測される。知事は核抜き条例を根拠に反対。

Q: 対話の場のファシリテーターへのインタビューは行っていたのか?
A: 今回は行っていないが、今後必要に応じてインタビューする可能性がある。

Q: 7月19日付けの要望書への回答はあったのか?
A: 経産省から7月29日までの回答は難しく、組織の方向性が決まってから連絡するとの返事あり

Q: 対話の場の公開は求めないのか?
A: 参加者の発言を守るため、詳細な議事録は非公開としている。一方で、より開かれた場にすべきだったとの指摘もある。

今後の検討課題

- 今後の対話の場に生かすため、振り返りと検証を継続する
- 地域分断の影響について更なる検証を行う
- 地域分断の早期解決と再発防止に向けた取り組みを行う
- ファシリテーターの責任と役割について検討する
- 神恵内村の対話の場についても検証する
- 最終処分事業のあり方そのものを見直す必要性について議論する

第３部

要約／お題と語りの重ね合わせのまとまり

第３部では、対話とは／対話の場とは何か・どうあってほしいか、ファシリテーターの役割やファシリテーションとは何かについて意見を述べあい、言葉を重ね合いました。

Q: お題: 対話とは何ですか?
A: 対話とは命の行為であり、お互いの存在を認め合い、互いに変わり得ることができ、未来を作る責任ある行為です。

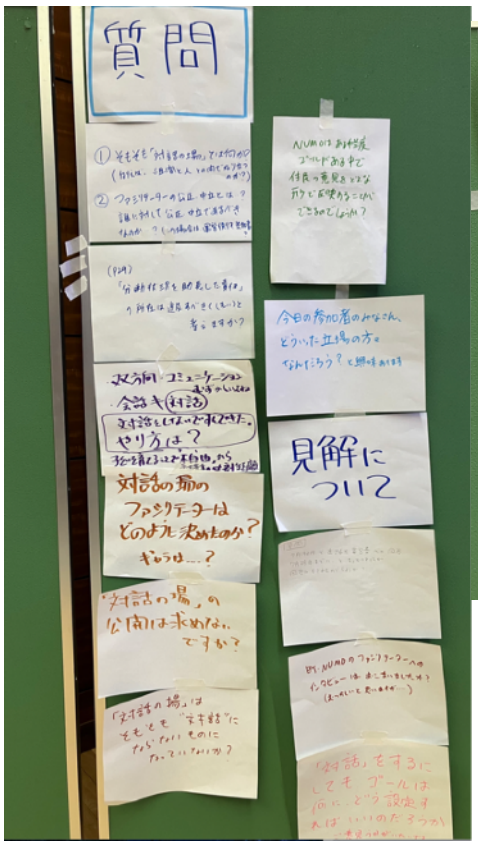
Q: お題: 対話の場とはどのようなものですか?
A: 対話の場は時間的・空間的に広がりを持ち、現実的な制約の中で作られるべきで、正解のない中で、参加者全員で答えを探っていく場所です。

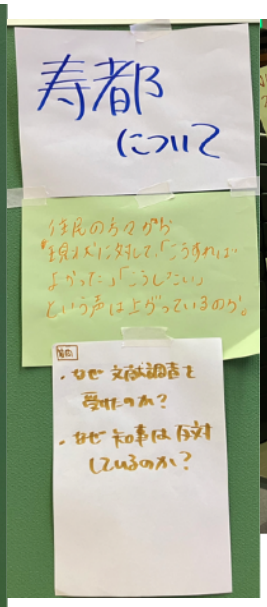
Q: お題: ファシリテーターとは何ですか?／どんなファシリテーションが望みですか？
A: ファシリテーターは公平で中立的な立場から、がまん強く参加者の本音を引き出し、安心して発言できる雰囲気を作る役割を持っている／参加者に心理的安全性を与え、お互いに尊重し合える場を作ることが重要です。力の行使を伴うことがあると自覚的な。

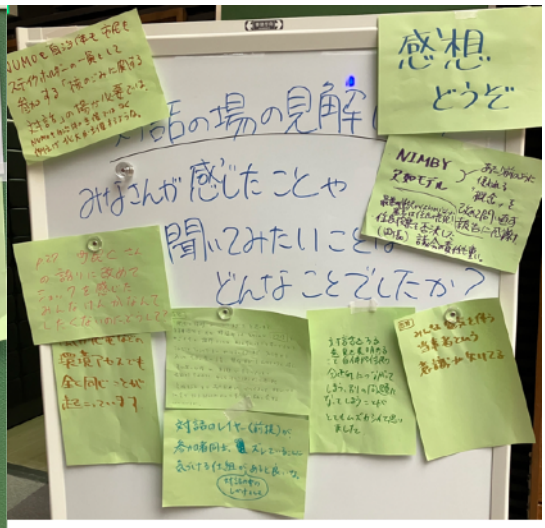
＝　視覚化の記録　＝

1. 第２部の記録から

1）寄せられた言葉







市民ファシリテーションのきたのわが第２部の司会進行を担当し、報告者の説明の後で、会場からの質問や感想を質問紙に書いてもらい、受け取った報告者と報告者補佐が質問に応えるという形式にしました。感想として書かれていたものを以下で紹介します。

2） 感想

- NUMOも自治体も市民もステイクホルダーの一員として参加する「核のゴミに関する対話」の場が必要では。NUMOや自治体の主催ではなく、例えば北大が主催するような。
- P27町民Cさんの語りに改めてショックを感じた。みんなケンカなんてしたくないのにどうして？
- 風力発電などの環境アセスでも全く同じことが起こっています
- 対話のレイヤー（前提）が参加者同士ずれていることに気づける仕組みが対話の中の仕掛けとしてあると良いな
- 対話をする意見を表明すること自体が住民の分断につながってしまう、別の問題になってしまうことがとても難しいと思いました
- みんな電気を使う当事者という意識が欠けている
- NIMBY欠如モデル　あたりまえのように使われる「概念」を改めて問い直す報告に感謝。最善の選択はわからないが、署名は住民の意思！住民投票を否決した（町長）議会の責任も重い。
- 開会の挨拶がひどすぎたと思います。趣旨説明をただ棒読みするというのは「対話」を目指す会の挨拶としてはありえないことではないですか？これだけファシリテーターがいるのならまずファシリから入って、今日の会の趣旨、構成などをわかりやすく話し、参加者の心得は第3部でいうべきこと。最初から言われるとみんな引いてしまうように思います。欠如モデルとか専門

用語がでてくるのも疑問です。この会がリスクコミュニケーションの専門家のための会ならいいのですが。

2．第３部　時系列記録と語りの構造化

◆語り言葉の聞き取りをオンタイムで時系列として文字による可視化（スクリーン投影）

担当　郡伸子

第３部テーマ
対話とは・対話の場とは・ファシリテーション・ファシリテーターとは何か

意見の重ね合い１：対話とは

- 相手の意見を理解することが対話。グループでは生命の存在確認。相手がいなければ自分を確認できない。
- 対話とは生命の呼応である。
  すれ違っているだけでは何も起きないけど、話すことで存在を意識する。良いことを一緒にする。
- 何かをお互いの立場などを理解し合う。
  お互いに言葉を擦り合わせていく機会がある。
- 対話は、独りよがりにならないために他の人とすり合わせをする。
- 違うことを前提に置いて。双方が変わっていくこと。
- 私たち人間ができる未来を作る責任ある行為

第３部テーマ
対話とは・対話の場とは・ファシリテーション・ファシリテーターとは何か

意見の重ね合い２：対話の場とは

- 今見える範囲内だけでなく、空間的にも時間的にも広がっている。
- 現実的な想定で立ち上げなくてはいけない。
- 民主主義の認識の違いがある。
- 正解がない中で、集まって探っていく場。
- 対話はお互いの意見が違っても聞く、話す。ゴールがなくてもいい。思っていることと反対のことを聞く、話せる場。
- 合意できないことがあるが、差し当たり、合意を目指した方が良い場
- 新しい解釈が生まれる場と書いた。皆さんの意見を聞いて、対話を触発するハブになる場

意見の重ね合い３　：ファシリテーションとは何か

- 真に公平であり、中立であるための技術
- 未来志向として。対話自体が関係者の意見を踏まえてみんなが望む未来を築くものとして。
  みんなの本音を分かち合うようにする技術。
- 対話は難しいもの。盛り上げるだけでなく、お互いの意見を引き出していく。引き出す役割。
- 参加者が心理的な安全を確保して、ちゃんと聞いてもらえた、ちゃんと話ができる場。心配り。
- 冒険していい、お互いの話を聞き合えることを促せる。
- ファシリはやさしいと言う意味がある。誰でも話ができる。対話は対等。対等の場を作る。対等を担保することが信頼性。
- フランス語で「やさしい」と意味が響いた。対話の意味、背景によらず対等に意見を出せる点。寿都の場は対話の場になっていないのではないか。

意見の重ね合い４　：ファシリテーターとは何か

- 対話の場で自分が馴染めるようになってくる。潜在的な役割。
- 笑顔が素敵で安心感のある人。中立に平等に話を聞いてくれる。話せない人の話をうまく引き出してくれる人。ファシリテーションが柔らかい感じ。白黒では無い場で、いろいろな問題を話になって話せるような場。そういう人がファシリテーターだといい。
- 第三者で外から来ることが多い。地域のことを勉強してもらいたい。賛成・反対いろいろな意見が出てくるけど、どちらにも寄り添うことが大事。地域のことを話してくれると、地域の人は安心する。地域に寄り添って、安心感を与える人。
- 100%中立的にはなれないので、相手を尊重して意見を引き出す。
- 対話の場を設ける場合は、合意形成や解を出さなくてはいけない。聞こうというカウンセラーとして傾聴して意見をフラットにする。
- 希望になってもらいたい。いろいろな雰囲気になるが、希望を持てる雰囲気にしてほしい。
- 話したくなる、話ささる場になるように手間暇かける。一人一人が指されなくても話す。
- 自分の権力に自覚的である。ファシリテーターは、誰かから出された意見を可視化して、勝手に仕切る人になってしまうので。

誰かが発話者の言葉を、自身の言葉に関するフィルターを介してであっても、形にするという作業は難しいことです。「正しく聞き取っているか」であるとか「自身のバイアスがかかってはいないか」など、そして書かれた文字を目にすることによって微妙な方向づけがなされないだろうかといった不安（書く方も語る方も）もあるわけですから。

その困難さにもかかわらずスクリーン上には語られた言葉が丁寧にゆっくりと流れていきました。語られた言葉を耳で受け止め、咀嚼しながらスクリーンを見たりして、次の語り手やその次の語り手は揺り動かされ、多くの言葉の中から自ら選び、先の言葉に重ねていきました。

🔶 語り合いの世界を静止した模造紙の中に見る／構造化的何か

担当　明田川知美

語る言葉が時間軸で前後に継ながり、課題ごとの言葉もまた横に繋がっていった「考えよう会」です。
これは語り合った後の全体共有の一つの場面です。

言葉を重ね合わせてみるという試みは、語られたことの構造化を阻むか否か。このような視点で眺めるなら、担当者の「バラバラにして構造化しなかったんですよ」という発言（「文字起こし」を参照してください）と、「なんか本当に連想ゲームみたいになってたから、…なんかすごく面白くて」という発言は重要です。

郡さんと明田川さんにお願いしたのは、記録に際しては主観が混じっていて良いので耳に残った言葉で書き留めてくださいということです。「初めの方が何か理解意識すり合わせとか、あとそこに関わる・変える・分かるとかいう単語が繋がってきて、次に対話をどうあってほしいみたいな」という流れが模造紙の中に描き出されました。「構造化」を語ることは大事なことです。

＝　主催雑感　＝

ファシリテーターは公平で中立的な立場から参加者の本音を引き出し、安心して発言できる雰囲気を作ることが重要だとの語りが重なりましたが、その公平で中立的な立場とは一体どのようなものであるかに関しては語りが及びませんでした。安心して話すことができた（る）と言えるような安心が担保されるその担保がどういったものであるのかについても、語り合えていません。

なお、分断を見つめ直すような対話の場とはどういったものであろうか、ということへの直接的言及はありませんでしたが、ヒントになる言葉はあったのではないでしょうか。文字起こしをご覧になり、語られている文脈ごと受け取ってください。

また、仕切り直しという言葉を発した第２部の関係者の方の言葉（34-35）の重みは、尋常ではありません。今後、寿都町だけでなく、いえ高レベル放射性廃棄物の深地層処分の候補地のみならず、面倒臭い問題と格闘している人々や地域が必ずや直面する課題だと言えます。少し長いですが、部分的に引用します。（）内は補いました。

> 誰が仕切り直すの？（誰が）皮切りを作ってくださるんだろうか。それはやったNUMOもしくは町役場に仕切り直す最初のきっかけが、それこそさっきの責任があるのではないだろうか。私達は、じゃあ、ただ待っていれば、その仕切り直しのタイミングが来るんでしょうか？　誰がいつ？…可能性があった方がいいとか、可能性があるといいなっていう幸せな未来とか、…良い方だったところを見ていこうよっていう話とかは、ある意味わかるんだけれども。（しかし）え、それってちゃんとやるの…いつやってくれるの…私達の分断は、今日いま、（寿都に戻ったら）今日の夜からまた始まっている。

この仕切り直しには、関わる多くの（全てと言いたいが）人たちが何らかの形で集まるしかないと思われます。北海道弁で言うところの「集まらさる」「集まらささる」状況が希求されていますが、そのためには、NUMOが町民の会の言葉を丸ごと受け止めていく胆力が必要です。

繰り返しますが（一部で不評だった主旨説明棒読みですが）、今回の対話の場は反対運動の展開ではなく、面倒臭い問題での対話の場のあり方に関する異議申し立てであり、分断を如何に乗り越えることができるだろうかという声を透明化させないことでした。

なお、リスクコミュニケーションであっても、町づくりコミュニケーションであっても、気候市民会議でのコミュニケーションであっても、パブリックコミュニケーション・対話のあり方の基本形は大きく変わらないと思いますが、分野ごとに、領域ごとに、課題の性格ごとに何を重視するかが違ってきます。また、「複雑性」「不確実性」「多義性」「無知／非知」の問題を考えないわけにはいかないのが、四半世紀を迎えようとしている21世紀の私達の世界です。

＝　文字起こし　＝

主催側、市民プロジェクト側、コメンテーター等の方のお名前は実名表記ですが、その他の方は「A話者」「δ話者」などのように、アルファベットと小文字のギリシア文字で区別しました。

・・・・・・・・・・　**第１部**　・・・・・・・・・・・

総合司会　主催側・吉田省子 01:46　（13:30:0s）
　時間になったようです。こんにちは分野横断リスク問題研究会の吉田と申します。今日はお忙しい中お集まりいただき、ありがとうございました。何を言おうかとこれに書き連ねていたんですけれども、違うことを言ってしまいそうなので、これを話します…

【本報告書中巻末の「主旨説明」参照】

主催側・明田川知美 11:36　（13:39:50s）
　本日メディア取材が入っております。写真では後ろ姿しか映らないのですけれども、後ろ姿の撮影NGの方のために、舞台に向かって左手の方に撮影NGの席を設けておりますので、移動をお願いいたします。また個別にインタビューをお願いされることがありますが、その際はご自分でインタビュー可能か否かをご判断ください。よろしくお願いいたします。
それでは、この後第2部に入りたいと思いますので、交代します。

・・・・・・・・・・　**第２部**　・・・・・・・・・・・

「「対話の場」への見解（令和6年7月時点）」の所在場所
　　・・・・・

第2部　司会宮本奏 12:03　（13:40:17s）
　司会を代わろうと思います。はい皆さんこんにちは。第二部を始めていきたいと思います。第2部、ここからの進行を行います宮本かなでと申します。よろしくお願いします。あともう1人私の隣にいます。

津田光子
　はい。津田光子と申します。よろしくお願いいたします

司会宮本
　はい。では早速ですね、ここから第2部のお話に入っていきたいなという風に思っています。まず、それではここからはですね、ここにいらっしゃる核のごみに関する対話を考える市民プロジェクト代表の宮崎詩織さんより、なぜこのプロジェクトを始めたのかという思いや経緯を少しお話しいただきたいなと思っております。宮崎さんお願いして大丈夫ですか。
はい。お願いします（宮崎さんの「はい」を受けて）。

宮崎汐里 13:11（13:41:25s）
　はい。紹介ありがとうございます。核のごみに関する対話を考える市民プロジェクトの宮崎詩織です。まずはこのような報告の機会を作って下さった主催の分野横断リスク問題研究会並びに世話役の吉田省子先生にまずは感謝申し上げたいと思います。またご来場いただいた皆さんには私達の報告に耳を傾けていただけるということそして第3部では対話ということについて一緒に考えようという時間をご一緒していただけることを深く感謝申し上げます。

宮崎 13:51　（13:42:05）
　ここから私10分ぐらい自分たちが何でやろうと思ったのかっていうお話をしていくんですけれども、私が話してる間はぜひお手洗いもお茶飲みもぜひ行っていただいて構いませんので、ぜひ疲れない程度に耳を傾けていただけたらと思います。

　ではお話します。私達核のごみに関する対話をし考える市民プロジェクトですが今年先月ですね2024年の7月1日に任意団体として設立をいたしました。この名前の通り高レベル放射性廃棄物の処分についての対話のあり方を考えをとする市民によるプロジェクトです活動目標活動の目的がこちらに記載してあるものです高レベル放射性廃棄物通称核のごみと呼ばれる物に関するより良い台湾のあり方を探求したり想像したりしていこうこういう場を広げていこうということを目的としています。
　本日吉田先生らがお声掛けくださったこの会の趣旨も、冒頭ご説明ありましたけれども、何かや、誰かに反対するであるとか、何か喧嘩を売るであるとか、批判するみたいなことを目的とするんではなくて対話のあり方を探求創造しようとする場であるという風に感じましたので、私達もこの場を一緒に作りたいと思ってここへ参りました。
　会員は現在5名です情報発信については今QRコードを表示させていただいていますけれども、今のところはnoteというツールを使って情報発信をしていますので今日お配りしている各種資料館はそちらでダウンロードできるようなことになっています。ちなみにですね設立以降、よくご質問いただくのがこの団体の構成についてで、会員の構成について寿都町や神恵内に住んでる人たちで作られている団体なんですかという風にお聞きいただくことも多いんですけれども、そうでは現在はございません。現在の会員は寿都町神恵内村両町村に在住している北海道民の有志によって構成されています。

　ここまでの経緯についてお話します。今回の報告のテーマである対話の場というものは、皆さんご存知の通り高レベル放射性廃棄物の最終処分地選定における文献調査の実施自治体である寿都町神恵内村において両町村が設置をして、NUMOさんが運営協力を行ったという取り組みでございます。
　こちらに時系列で書かせていただきました。寿都町神恵内村での応募検討が表面化してからですね、文献調査が開始して後の2021年の4月から、この対話の場というのが立ち上げられています。文献調査がここまで来る間にですね、対話の場自体は寿都町で17回神恵内村で19回行われております。そして対話の場の振り返りあるいは当初のお名前は総括でしたけれども、この取り組みを総括振り返りしていこうという取り組みが昨年ですね昨年の6月にワーキンググループの中で位置づけられて、2024年、今年に入ってですねその振り返りが実施されたという形になっています。
　方向としてはインタビュー調査を行って、第三者専門家が助言アドバイスを行い、事務局が取りまとめるというふうな方法であったという風に私は聞いています。そして先週2024年8月1日の第6回特定放射性廃棄物小委員会で本件に関する審議が一旦1区切りという風になり、具体的な資料としては、振り返りの内容を踏まえ地域対応の基本的な検討に向けた留意事項集というものが今後、NUMOさんによって作られるというふうな、という風に理解しております。

　こうしたNUMOさんや経産省による振り返りが行われるということに耳にして私達市民プロジェクトは市民の視点からも対話の場を検証しようという風にしたのが、私達のプロジェクトの発端であります。市民による独自の検証は2024年2月からスタートしました。

この検証の発起人というのはこの今空欄になっているあの白い時期時間ですけれども、それぞれメンバー5人いますけれども、それぞれがそれぞれの立場から2020年以降文献調査実施自治体の育成後、それぞれの立場から見守ってきたメンバーでございます。この今の会員の5名自体は普段の活動や仕事の現場自体はそれぞれ異なりますが、共通しているのはこの4年弱寿都町民他の活動の声を直接聞いてきたメンバーであることです。メンバーはそれぞれが地元町民の皆さんからの声を聞いて寿都神恵内両町村外に住む自分にできることは何だろうかであるとか、核のごみ問題の当事者でもある自分たちが何をできるのかということを考えて、それぞれがそれぞれの行動を行ってきたメンバーです。

例えば、代表の私自身の経緯で申し上げますと、私自身は普段はいくつかの団体や法人で働いているものでその仕事のおよそ半分くらいを、いわゆるファシリテーター、話し合いや学び合いの進行役促進役として活動しています。特にこれまではまち作りや組織作りの領域で話し合いの場作りやファシリテーションを行なってきました。

寿都町民の葛藤の声を聞くように私自身があったのも、こうしたファシリテーションの活動を通じての問題でございました。その場というのが、先ほど来テーマにしている対話の場とは全く異なる文脈での話す場でのご縁からです。町民の皆さんが立ち上げた話す場を支援するというご縁から、私はこの核のごみという問題を真剣に考えるなりました。

文献調査が2020年10月、11月に始まった後、翌年の2021年1月から子供たちに核のゴミのない施設を町民の会が主催をしてくっちゃべる会という活動が始まっています。このくっちゃべる会の会議の経緯としては文献調査の応募検討の発覚以降、町内ではこの問題に関する賛成反対、いろいろな立場での対立が表面化したことで、だんだんとこの問題の口にしにくさであるとか、日常生活の中での会話しにくさが感じられるようになったという風に聞いています。こうした状況への懸念から寿都町民の皆さんに向けて、何でも話そうよというふうな呼びかけで、町民の会主催でくっちゃべる会というのが始まりました。

この参加を呼びかけるチラシに書かれているお誘いは表示している通りです。今までの寿都のこと。これからの寿都のことをみんなでぼちぼちくっちゃべりませんか。というものです。そしてこのくっちゃべる会を、私が会員として参加を受けている北海道のNPOきたのわが支援をしており。私自身もきたのわファシリテーターチームのメンバーの1人としてこの会議に関わって参りました。

私自身はくっちゃべる会をお手伝いする中で、会の参加者の方からお話を聞いたり、町民の会の皆さんと出会っていきました。子供たちから、続く世代の方々、それから私の親、あるいは祖父母のような年代の方々に様々巡り合ってきました。そこで私が出会ったのは、会う人会う人の、寿都町が本当にいい町なんだよねっていう風に話をする様子でした。

私も現場に行ってみて感じたことですけれども、寿都の風景は本当に美しいですし、ご飯も美味しいですし、お祭りはみんなで作り上げて、町民はみんな仲が良かったんだととてものんびりした暮らしがとっても好きだったんだよねっていうことを、私が少なくない数の町民の皆さんから聞きました。

そこに突如として文献調査応募検討との報道が出たことで、暮らしが一変してしまったという声にも出会いました。私はこの話を聞きながら、うん。こうした文献調査意向を求められる対話ってどんなものだったのかという風に考えたときに、元々あった良さであるとか、今感じている残念さだとか、そういうことを率直にみんなでボチボチくっちゃべる、そのことがきっと町民の

皆さんに求められているんだということを感じてこのくっちゃべる会の対話のあり方に共感をして支援してきたという経緯です。

そして私達がくっちゃべる会を私がですね、きたのわチームと一緒にくっちゃべる会を支援し始めたその直後くらいの時期に2021年4月にNUMOや両町村が行う対話が始まったというふうな経緯です。私自身も同じ対話っていう言葉に、普段重きを置いて活動している者ですから、この対話の場というところでどんな話し合いが行われているのかということについては追える限り追うようにして、その中で疑問や違和感といったものを徐々に持つようになって、というのが経緯です。

私の場合はこのような経緯なんですけれども、先ほども申し上げた通りプロジェクトの会員もそれぞれ、この核のごみっていう問題について様々活動してきたメンバーです。核のごみに関する問題への理解を広く深めようというふうな目的で学習会を開催してしたりであるとか、署名活動の展開に参加するなどして私以外のプロジェクトのメンバーもまたこの対話の場っていうことに関して様々な違和感であるとか疑問というものを感じていたという、そして私達この対話の場に疑問であるとか、違和感とかを感じていたメンバーが集まって市民による検証プロジェクトをスタートさせたという経緯です。私達も疑問であるとか、違和感を胸の中にしまっておくだけにするんではなくてきちんと資料を参照しながら検証し直そうとしたのが今回の取り組みだったんです。

検証を行う主体というのは何もNUMOさんであるとか、経産省さんだけでなくていいという風に考えていて、私達市民は市民の視点から独自に検証をして、その検証内容を公表しようという風にして参りました。そしてこの度、2024年7月19日付で経済産業省NUMOそれから特定放射性廃棄物小委員会の各委員の皆様宛に要望書、それから加えて、経済産業省の方には公開質問状をお送りしています。今日お手元にお配りした資料がその中になっております。

8月1日に行われた小委員会では、私どもの資料が参考資料として取り扱われて経済産業省あるいはNUMOさん、それから各委員の皆さんから意見が述べられたと言うところです。今日は主にはですね、一番分厚い資料になりますけれども、「対話の場への見解」っていう資料を元にご説明をしていきたいと思います。

報告の前に申し上げておきたいこととしては、私自身は対話やファシリテーションというテーマを大切に活動してきた1人ではあるんですけれども、先ほども申し上げた通りまち作りや組織作りにおける実践が中心でして、いわゆる科学技術コミュニケーションであるとかリスクコミュニケーションにおけるファシリテーションという風になってくると、体系的に学んだことはありませんし意識的に実践したこともまだありません。

という中で今回は分析のための試論としてリスクコミュニケーションなどの学術的な蓄積を借りるというような形で話を進めたものになります。そのため正確さに欠ける部分であるとか、分かりにくい部分であるとか、そういったことも多々あるかもしれないなという風に思います。ぜひ今日お配りした資料については、たくさんの皆さんに気になるところご自身の中で気づいたことをメモしていただきながら聞いていただいて、この後の意見交換やご感想質問等の時間に意見を様々を寄せていただければ幸いです、今日はどうぞよろしくお願いします。（拍手）

司会宮本奏 29:19（13:57:33）

はいありがとうございました。

ここまで今このプロジェクトを始めた経緯であったりとか、あとご自身の思い、そこには違和感や疑問があったっていうところを少しお聞きしてお話しいただきました。ではここからは今日

のちょっと本題の方に入っていきます。皆さんお手元の資料の中に、対話の場への見解令和6年7月時点というもののホッチキスどめのもの資料があるかと思います。こちらについて、再び宮崎さんからの説明や報告をお願いできたらと思います。お願いします。

宮崎汐里 29:55（13:58:09）

はい。ありがとうございます。皆さんお手元に対話の場への見解という資料ございますでしょうかそちらをご覧いただきながらご説明させていただきたいと思います。はい。それでは報告いたします。まず1ページご覧いただきますと本稿の背景や目的ということが書いてございます。先ほどご説明した通り、対話の場を市民が独自に振り返りましたというふうな内容です。

少し飛んで、この４ポツのところになりますけれども。はい。お願いします。この対応の場をどう振り返るのかということについては、何を良いとか悪いとか評価していくのかというふうなことになると思うんですけれども、ここで問題になることの一つとしては、対話によって何を目指すのかという目的設定であるという風に考えました。この目的設定というテーマはこれまでの対話の場における参加者のインタビューの履歴だとか持っていたり、議事録なんかもとっているんですけれども、そこでも、どういう目的なのかっていうような議論はかなり生まれてきていますし、振り返りに寄せられた第三者専門家の助言においても、疑問であるとか指摘が少なくないと私は理解しています。

この対話の場っていうのをどういう風に考えるのかということなんですけれども、改めて申し上げますと私達プロジェクトの会員は何らかの専門分野の研究者ではないということがございます。1人1人が北海道に暮らす生活者であるということから、もしかしたら学術的に対話がどのように議論されてきたかについて明るいとは言えないかもしれませんですが、普段から生きていると対話であるとか、人間同士のコミュニケーションっていうのは欠かせないところであり、このコミュニケーションということが私達の生活にもたらす影響ということについては皆さんに同じく肌身で感じてきたと思っています。

皆さんはどんなふうな対話のご経験があるでしょうか？私達はより良いコミュニケーションというのが、その場にすごく良い影響を与えるという風に考えています。よりよいコミュニケーションの場が、その場の参加者にひらめきであるとか、イノベーションをもたらしてくれるという風に感じていますし、それから異なる他者同士が率直にこう話したり聞いたりすることで、1人では到底思いつかないアイディアが生まれる。そうして生まれたアイディアというのがその場、内外のあらゆる関係者の生活を助けるということも感じてきました。

そういった良いコミュニケーションをしているうちに、対立していた方同士の関係が変化していて、協力関係が築かれるということも、私は経験があって、会話やコミュニケーションというのは非常に豊かな可能性を秘めているという風に、生活者の1人として感じています。

反対に、よりよくコミュニケーションできないという環境が我々にもたらす負の影響も感じているところです。例えば、意見をどうぞっていう風に言っていただくっていうことも、普段のコミュニケーションの中で増えつつあると思うんですけれども、相手に全く意見を採用する気がないんだというふうなことを感じたときに、それは合意形成に立ちいるなというような排除にさえ感じられるという経験があります。

排除されるとだんだん諦めが生まれてっていって口を閉ざすことが増えて、そしてますます言葉にできない想いというのが蓄積した先に、沈黙っていうような姿勢を示したとき、相手側から意見がないっていう風に判断されたりすると、本当に自分の心の中で、私の意見があるのにという心の叫びが起こってくるということの体験もあります。こうした体験から、私達は、対話や人間

同士のコミュニケーションが1人1人の人生であるとか生活の質に非常に大きな、良い悪い正負の影響を与えるものであるという認識に立っています。
　まして今回の高レベル放射性廃棄物という非常に高い毒性ゆえに人体や生活に多大な影響を与えるというものの処分に関するコミュニケーションは、何重もの慎重さが求められるべき質のものだという風に理解しています。

　この問題については危険性が非常に高い上ですね、地震大国である我が国での処分方法の検討や処分選定のあり方についても抜本的な見直しの必要性が訴えられる訴えられているという風に理解しています。その、そうしたことが、も関係して、扱いが非常に過酷な課題であるという風にも感じています。
　つまり事業実施への主体であるNUMOさんが、地層処分の必要性や安全性を訴求するっていうことを命題に掲げているのに対して、日本学術会議の答申であるとか地質学者の皆さんからの声明文などの論考では、長期に渡る安全性と危険性の問題に対処するにあたる科学的知見の限界っていうような問題が指摘されていて、この問題の取り扱いのあり方についても、科学者や専門家の間で大きく見解がわかれているという風に認識しています。
　この専門家の間でも意見がわかれているという複雑な問題をテーマとして、私達一般市民というか国民はどんな風に対話を行うことができるのだろうか。このような問いを私達は持ちました。海外、すると第1に、生命体への重大な危険と隣り合わせの核のごみの処分方法について安全性、危険性への評価を下すことが、現時点の科学的知見において困難である、とする意見もあって、社会的な合意が欠けているとするならば私達国民はどのようにこの問題と付き合い、対応し、現在世代や将来世代の暮らしに資する検討を進めることができるのだろうか。これが大きなテーマです。そして第2に、このどういう風に会話ができるのか、今のところ分からないっていうところなんですけれども、その分からなさ含みの対話の場っていうのを実際に体験することになった地域住民はどんな対話を行うことができたのか、このことが関心としてございます。

　この第2の問いについて探求したのが本稿であります。専門家の間で多様な見解があるのと同様に、文献調査を受け入れた両町村民にも多様な意見や疑問があったはずです。そうした多様な町村民自身とその意見が対話の場においてどう扱われたのか。ということが検証のテーマの一つでありました。特に寿都町神恵内村での対話の場の運営は、文献調査受け入れに手を挙げた町村と地層処分の必要性・安全性を訴求するNUMOであったということに注目をして、地層処分事業を推進したい事業者が積極的に支援する対応の場で意見が異なる地域住民がどのような対話をすることができたのか、またそのコミュニケーションが地域住民にどんな影響を与えたのか。ということに関心があります。
　ということで私達プロジェクトはまず寿都町における対応の場について検証をしてみようということで、対応の場および付帯事業である町の将来を考える勉強会について資料の調査を行うとともに、2024年2月から参加町民3名への聞き取り調査を行いました。この文章はこうした私達の取り組みの中間的なまとめにあたります。
　この後は少し抜粋しながらお話していきますけれども、はい。このプロジェクト自体の目的もですね、高レベル放射性廃棄物に関するより良い対話が行われることを願っております。今回中間的なまとめということで、ぜひ引き続きをお耳を貸してください。

ページの4ページ目に行きます。検証の視点ということでこの対応の場はどういう風に検証していくのかっていう視点を三つに、今回整理してみました。一つ目は地層処分事業のリスクというのをどういう風に捉えるのか、というような視点から発する検証の視点です。

この地層処分事業という課題の捉え方についてなんですけれども、この地層処分というあり方については法律できちんと規定されてでありまして、その内容はこちらに書いてある特定放射性廃棄物の最終処分に関する法律というところで、はい、定義がされています。

この法律において、地層処分も規定の処分方法であるという風に掲げているということはもちろんあるんですけれども、その規定の処分方法であるという風に掲げていることに起因してか、この文献調査の受け入れに対して、反発であるとか慎重な行動をする住民に対して、しばしばNIMBYという風に表現をされるということが観察されていると思います。

引用（脚注）の方に書きましたけれども、実際に資源エネルギー庁の記事の中でもNIMBYということが書かれていたりするというわけです。我が家の裏庭には置かないでというふうな意味ですけれども、公共に必要な施設だということは認めるものの、自らの居住地に建設されることに反対するというふうなことですが、そういったNIMBYというふうな眼差しを、本当にそのような業者でいいのかどうかということを、問うところから議論をスタートしたいという風に書かせていただきました。

先ほど報告の背景目的のところでお話したように、地層処分事業の安全性や危険性についてそもそも地層処分というあり方で良いのか、現行の政策のままで良いのかということについては様々な意見があるということが否定できないんじゃないかなという風に考えています。それが先ほどご説明した日本学術会議の答申であるとか地学の専門家300名の皆さんによる声明のお話です。日本学術会議の答申においては従来の政策の抜本的見直しを求めるというふうなことがあって、地層処分をするということではなくて、暫定保管をする、あるいはゴミの総量管理を柱とするっていうふうな形で政策枠組みの再構築を提案しています。

地学の専門家の分析の中でも、中では、激しい変動帯のもとに置かれているこの日本という国において今後、10万年間、核のごみの毒性が下がるまでの間地殻の変動による岩盤の定着性や深部地下水位の状況を予測したところで、この地震の影響を受けない安定した場所を具体的に選定することは現状では不可能であるというふうな宣言が出されました。

こういったことが社会的に観察意見として観察されているという中で、つまりそもそも現在のプランで良いのかっていう問いかけに対する答えが学術の世界でも揺らいでいるということが言えるんじゃないかという風に私達は考えています。この揺らぎというか、様々な意見があるという中で、この地層処分に対して慎重にありたいというふうな意識を、単に外側からNIMBYだという風に要請することはできないんじゃないか、という風に考えました。

このことをリスクコミュニケーションというふうな学術の蓄積で何か理解し直せないかという風に試みたのが、この下の表になります。このリスクっていうことについては、いくつかの分類ができそうであるというふうなことを、はい、考えました。皆さんの方がもしかして詳しい内容かなという風に思っています。リスクの分類としては、そのリスクの存在だとか特性だとかを既に既知のものであるか未知のものであるかというふうなことを、見つめる視点があるということを学びました。

既知のリスクであれば、このリスクを、所以として起こるハザードだとか言ったものの結果のばらつきが安定的な状態になっていて、意思決定の根拠として活用可能であるというふうなことを

考えたときに私達が感じたのは、学術の間で議論されているというこの日本学術会議や地質学者の声明文というものがこのリスクの未知性の指摘に当たるんじゃないかという風に考えています。
　この未知性が指摘されているという状況下で、この問題に関してどういったコミュニケーションを行うことができるのかということは肝要だという風に考えています。元々このリスクコミュニケーションっていうことにおいては、古典的な仮説として欠如モデルというふうな仮説があったわけなんですけれども、そのこの妥当性がかねてから疑われてきたというふうな前提があると感じていますし、とりわけ2011年の東日本大震災後日本における科学の信頼への危機という風に分析されるような状況においては、欠如モデルっていう形からの見直しっていうのが必要なんじゃないかということが議論されてきたところと思います。

　ぜひ八木先生の論考からの引用も読んでいただければと思います。この福島第1原子力発電所の事故以降の現在ですね、先生がおっしゃることとしては、私達国民であるとか、対話の場に参加するような私達が公的発表の大綱的な位置づけにある情報を求めて総合的に判断するっていうことは当然のようなことだと言えるだろうというようなことをおっしゃっています。というわけで、私達はこのような専門家の間でも意見がわかれている内容であるということ（から）、それから私達、国民と呼ばれる私達がこの大綱的な情報も含めて総合的に判断したいというふうな要求があることが当たり前だという風に考えたところから、検証の視点としてリスクに関する情報提供のあり方というのを提出してみました。
　対話の場におけるリスクに関して、参加者が得たいと感じる情報が十分に提供されていたのだろうか、それから対話の場が一つのリスク判断に対する受容を求めるようなプロセスになっていなかったか、というようなことが問いとしてあります。

　そして検証の二つ目が、対話っていうことが含意しているような意義っていうことが様々あると思うんですけれども、その視点からこの対話の場がどういうものであったかというような視点です。私達市民からすると、対話という2文字熟語には様々な意義が、意味があるという風に感じているんですけれども、その定義っていうのはなかなか吉田先生の話にもあった通り難しいという風にも感じています。

　そこで今回リスクコミュニケーションにおいてはどう議論されてきたのかというところで、まあ一つ、一方向のコミュニケーションの経路ということに加えて双方のコミュニケーションが求められてきたというような学術的な蓄積を参考にしました。
　リスクコミュニケーションにおいて、対話っていうことは試みられる背景にはこうした双方向のコミュニケーション希求という背景があろうかと思います。この双方向性ということについても様々な分析の目線があるということを学びました。特にこの2ぽつ目ですね、見た目上、双方向のコミュニケーションが行われているように見えても、そこに相互作用的な過程があるかどうかっていうのを疑わなければならない、という風にされている内容を参照しています。
　この双方向性というテーマについて、形式的な方法であるのか、実質的な双方向であるのかというふうな分類がされるというわけで、私達としては対話っていうふうなメッセージを掲げるのであれば、ぜひとも双方向実質的な双方向のコミュニケーションがあってほしいという風に願うという目線もあるものですから、検証の視点の二つ目としてはコミュニケーションの双方向性という視点を挙げて、対応の場合に実質的な双方向コミュニケーションがあったんだろうか、あるいはこれがもしあの形式的な双方向のコミュニケーションの場に過ぎないとするならば、一般に深

い双方向性を私達が仮に連想するような対話っていう表現を使うこと自体、適切なんだろうかという問いを挙げました。

ここまではリスクコミュニケーションの分析の論を参考にするような形で進めてきているんですけれども、三つ目についてはこの地域、地域社会への影響っていうふうな視点を挙げています。これが私達市民プロジェクトが検証を行っていく上での強い動機の一つでございます。この文献調査受け入れの地域社会の反応が様々あった中で、この地域社会の関係性に、この対話の場がどういう影響を与えたのかという視点です。

この文献調査という仕組みですけれども、現行の制度においては首長の判断のみでこの調査実施応募や国からの申し入れ受託が可能だということになっています。そして寿都町も首長判断でこの文献調査実施自治体に名乗りを上げたというふうな形になりますが、この手を挙げて以降の地域社会の状況というのを、知るための経緯というか、時系列の流れを表にまとめてみました。

参照していくと、特に8月27日（2020年）というところにありますが、町内でこの見直しを求める署名が695筆集まったということで、決して少なくない数の町民の反対意見が表明されたという風に見られます。それから周辺の町村長などから抗議も相次ぐというふうなことが、私達も皆さんもご存知の通り、起きてきたというわけです。実際に町内の水産加工業者の方々が消費者の方から文献調査に応募するんであれば、もうあなたのところの商品は買わないよというふうな電話を受けるというふうな実態もあって、私達からすると、町民生活であるとか生業が脅かされるような危機を感じるということは想像に難くないという風に考えています。

そして町民活動団体も結成されたということになる。この反対の意見については、文献調査受け入れの1年後にあたる町長選挙においても現職の片岡町長と文献調査撤回を公約とした越前谷候補にそれぞれ1135票と900票が入るなど、文献調査の受け入れ1年後においても根強い反対意見があり続けたということも想像に難くないと考えます。

このように反対する意見、慎重にいきたいという意見があったということもそうですし、様々な意見の対立があったということは、新聞報道などでも表現されているところかなという風に思います。ただ、なんていうんでしょう、単純な意見の対立ということよりかはこの対立構造というのは非常に複雑なものであった、という風に私達は捉えております。この対立構造が複雑であるという背景には、最終処分政策の建て付けが強く関係しているというふうなことを書かせてもらいました。

第1の背景は首長のみが文献調査応募の権限の申入れ受託の経験を持っているということ。そして第2の背景としては20億円、上限20億円の交付金が支援措置として組み込まれているということで、結果、交付金目当ての首長の独断専行が図られる可能性作りの制度であるということです。

そして、なので交付金だけを受け取って次には行かなくていいんだっていうふうな意見も公の場で述べられているということがありますけれども、一方で第3の背景としては、概要調査地区選定に進まないための条件が限定的であるということで、選定プロセスからの離脱をするという正式な手続きについては明文化されていなくて、人によっては青信号か黄色信号しかないっていうふうな表現をする方もいらっしゃると聞いておりますけれども、一度選定のレールに乗ってしまえばそのままなし崩し的に次の調査に進まざるを得ないのではないかという懸念もつきまとう制度だということです。

こうした制度の建て付けを背景として様々な賛成反対判断保留の態度が表れているという風に私達は分析しています。こちらにそれぞれ調査受け入れのプロセスについて、電源立地交付金の受け取りについて、文献調査の受け入れについて、概要調査の受け入れについてそして最終処分場の受け入れについてということで、それぞれの論点に関する賛成意見、反対意見として新聞報道なども含めて観察されたものをまとめました。

はい。この単に最終処分場が来て欲しくないというような心理感情として表現されるような、されやすいような論点だけではなくて、様々、それぞれの視点で賛成反対の意見があるっていうふうなことが言えます。14ページをご覧ください。この表をさらに深く読むとすれば、いわゆる調査賛成派という風にされている町民が必ずしも最終処分場受け入れに賛成しているとは限らない、ということがあります。最終処分場受け入れについては賛成しがたいけれども、交付金を受け取るだけならば文献調査や概要調査の受け入れには賛成であるという意見も各種報道でも取り上げられております。一方で、本当にそれで終わりでいけるのか、交付金をゲットすれば終わりでは済まないのではないかという懸念も根強くあるわけです。

こうしたように、この文献調査受け入れというテーマに対して過大なフレーミングがそもそも違うということも言えるんじゃないかと考えています。交付金をゲットできるか否かというふうな課題設定をするような目線もあれば、現代世代の、それから将来世代の健康を守れるか否かというふうな課題設定をしている方もいる。このような意見の対立という風に一口には言えないような様々な思いがあるんじゃないかという風に考えています。

その様々な意見があるということについて、私はヒアリングの中でこのような声を耳にしました。いろんな意見があって当たり前だと思う。みんなは町を良くしたいっていう思いから賛成したり反対していると思うと、他がこの核のごみの政策とどう向き合うかという問題が、国やNUMOから手助けもなしに押し付けられている、そういう風に思う、というふうな声も聞いています。

こうした問題がこの寿都町という街に降りかかって以降、住民説明会では野次が飛び交うような状況になったりですとかになっていき、この最終処分政策の手続きに内在する問題のしわ寄せを町民が一点引き受けるような様相になっているんじゃないかと思います。

この対立っていうことも、もっと複雑なものがあって町民の関係性がとっても近いっていうことも背景にして、態度の表明はより複雑なものになっていきました。反対署名を集める際に、家族が役場に勤めている人だからこの反対署名は自分の意見とは別に書けないよ町長の血縁者と一緒に働いているから書けないなど、意見表明を公にできないというふうな状況も明らかとなっていたわけです。

町内、いま多様な視点からの意見の対立があっただけでなくて、この問題の語れなさというような課題も浮き彫りになっていきました。このような複雑なものについて意見の様々な対立や、それから語れなさということが背景にある中で、日常生活で葛藤や精神的苦痛を体験したという町民の方もいらっしゃいます。

例えば子供が出たいという風に言うから、住民説明会に連れて行ったと。そしたら子供を反対活動に使ったらおしまいだっていうような声が会場から聞かれて、他のみんなもそういう風に思っているのかなと思って怖くなったであるとか、それから所属していた団体のメンバーからこの人がいるってことは、この団体も反対派なんでしょっていう風に言われたよっていうふうなことを教えてもらって、そういうふうな目線で見られちゃうんだというふうなことを知って、自分と相手が話したら、かわいそうな思いをするんじゃないかということをお考えになって話すのをやめるようになっていったとか、この普段していたコミュニケーションがどんどん取りづらくなっていったというふうな声を聞いています。

そういった語れなさとか対立っていうことに対して対話の場がどう機能したのかという点が、検証の視点三つ目です。分断や対立が起きやすいテーマに関する対応の場で一体何が目指されたんだろうか。対話の場は分断する地域社会にどんな影響をもたらしたのかという問いです。

というわけで私達は様々分析などを行ってきました。3にあるのは、関係法令や計画における対話の場の目的です。関連法令や計画においては対話の場の位置付けに関する記述が様々ありますけれども、それを表に抜き出してみました。ここに書いてあることを分析しますと、対話の場っていうものについては経済産業省であるとかNUMOの立場としては、この対話の場を支援するというような立場であるとか、協力するというような立場にあるということです。

それが今回の寿都神恵内の対話の場でも、はい、そのような一般の建て付けになっていて主催者はあくまで町や村であるというふうな形でNUMOさんが運営の協力をするというふうな形になっています。これを見ていったときに、私達検証をしたプロジェクトが掲げた検証の視点三つについては、特にこの計画時点では明記されていないということが様々観察されています。

このリスクに関する情報提供のあり方については専門家からの多様な意見や情報の提供の確保を含めてその活動を継続的かつ適切に支援するという風にあり、この文章を読めば専門家からの多様な意見を紹介するということも含めて仕事の内容になっているということも分かります。一方でNUMOの対話・広報活動計画においては、機構自らが情報提供を行う説明を行うというような記載にとどまっていて、専門家などからの多様な意見や情報提供の確保に関する記載は確認できていません。という風にちょっと記載の内容もばらつきがあるという風になってしまいます。え一双方向性については基本方針においては関係住民の意見が最終処分事業に反映されることを通じて地域の主体的な合意形成が図られることが重要だという風に書いてはありますが、一方、どんな風に意見を反映するのかっていうようなことについては具体的には明記がされていないというような状況になっています。また地域社会の混乱への対応とその影響については、特にこの地域社会の混乱に対して対応するというふうな事項は明記されていないというような中身になっています。

時間がちょっと過ぎていますけれども（14時36分／第２部開始後56分経過）、はい説明続けさせていただきます。寿都町における対話の場の実施内容ということで、ここから具体的に寿都町の対応の場がどのような中身だったのかということを書かせていただいています。

この対話の場については元々ですね、この会則というものが第1回第2回の対話の場において示されて、それがかなりな議論になりました。当初も会則案の目的においては、この高レベル放射性廃棄物の地層処分事業についてその仕組みや安全確保の考え方、文献調査の進捗状況等の情報を基に意見交換を行う、および、地域の将来ビジョンに資する取り組みについて意見交換を行うことを通じて、広く寿都町民に地層処分事業の理解を深めていただくことを目的するという風にあったのでした。

この会則案について、会の目的が処分場誘致ありきのように不適切だということで会員から批判を受けています。それから会員については町が指名した町議や産業団体の長のみに参加枠が限られていて公募枠がなかったということを踏まえて、第1回からの意見としては、産業団体の長という立場では、対話の場で発言することができないと、団体内部には賛否両方の意見があって、個人的な意見だとしても団体の総意と受け取られるのであれば、事業にも影響が出るというふうな意見が出ていて、自由闊達な意見交換がしにくいというふうな指摘が出されています。そして参加控えや委員の辞任というのが相次ぎました。こうして設置者に関しても明記がなかったということで、会議の主催者が曖昧だという意見があって、会則案が現在のものに修正されたというふうな流れになっています。こうした経緯を踏まえて作られた寿都町対話の場の基本的な建て付けが【表4-1】にまとめております。

この行われたことについて、先ほどの三つの視点について分析をいたしました。

初めに、リスクに関する情報提供のあり方です。公表資料によると、地層処分事業についての説明は第3回第4回第6回の対応の場で行われていて、説明を全てMUMOが担当しています。この対話の場の運営の中でさらにいろいろな立場の専門家からのお話を聞きたいという風に、少なくとも第1回第2回第4回の対話の場さらに付帯事業である町の将来に向けた勉強会においても、地層処分事業に対して慎重な考えを持つ科学者を招いた勉強会シンポジウムを行ってくれというふうな提案や要望があったところ、上記のこの意見に対して第6回、今から2年ちょっと前になりますけれども、その対話の場において、事務局からこの多様な専門意見のある専門家も招いた情報提供の場を設けますというふうな答えがあった。

準備を進めてまいりますというふうな回答があったんですけれども、事実上現在に至るまで該当する情報提供の場を設けられていないというふうな形になります。このつまりはこの対話の場においてリスクに関する情報提供がNUMOからの説明のみであったというふうなことが観察されます。

この内容についても実際に不満足だというふうなインタビュー証言も散見されますし、我々が分析しようとしているこの対話の場におけるリスクに関する情報提供として、少なくとも参加者が得たいと感じる情報が十分に提供されていたのかについては不十分だったという風に言わざるを得ないんじゃないかと考えます。そしてまた元々ですね目的自体、この対話の場に関する会則案として第1回で示されたものについては、この場の目的自体が地層処分事業の理解を深めていただくことを目的するという目的とするという風にあったのでした。

これ自体は先ほども申し上げたように会員からの強い批判を受けて変更をされているということになっているんですけれども、この、その会員からの指摘のおかげでこの観点からは会則案に

おいてはよりましというか、理解を求めるということではなくて、それぞれが意見を持つというような、リスクの受容を求めるようなプロセスからは修正されたのかなという風に考えています。
　ただ実際の対話の場におけるコミュニケーションがこういったリスクに関する受容を求めるものでなかったかということについては、議事録が詳細なものは非公開になっているということで検証が不可能困難だということが現時点の私達の理解です。今後もこの点については検証を試みたいと考えています。

　そして二つ目の視点です。双方向コミュニケーションの双方向性という視点でありますが、ここについては地層処分事業に関する対話の双方向性というテーマと地域のまち作りに関するテーマについての双方向性と二つに分けて書かせてもらっています。地層処分事業に関する対話についてはファシリテーターを奨励していることや、グループワーク形式が導入されていることであるとか、議論の可視化の手法などが用いられていて、形式としては双方向性に配慮した場作りが行われているという風に理解しています。
　一方でこの対話の場の意見を踏まえて、町の調査受け入れのプロセスや、それから処分地選定のプロセスそれ自体が意見を踏まえて変更されるであるとか、町民意見が反映されるっていうふうな可能性については、会則案には活かされていません。1人1人の地層処分事業に関する考え方や向き合い方の検討に資するように、自由で率直な議論を深めていただくという風に目的があるんですが、議論の主体として想定されているのは、町民会員のみであって、NUMOや町といった運営者が相互作用的に変容していくっていうふうな記述は見られないということがわかりました。

　実際のやり取りにおける双方向性という視点については一部の町民意見が最後の場の運営それ自体に反映されているようなことが観察されると考えています。例えば放射線に関する知識が必要であるとか、六ケ所村の地域住民と交流してみたいという意見が出されていますが、その意見を反映するような形で対応の場のテーマが放射線の基礎知識・六ケ所村の歩みというテーマで設定されて情報提供が行われているということが観察されています。
　一方でインタビュー調査、NUMOが行ったインタビュー調査の中では、議題に関して賛成派の意見をどんどん実現していくと感じたというような意見であるとか放射線の話も何でもないような印象の話が多くて、そうではないつまり慎重な意見の専門家の話が実現していないという証言もあって、この反対慎重派の方たちの意見も踏まえて事業に反映していたかというと、現時点では評価できないという風に考えています。
　また先ほどNUMOさんというところで、課題のフレーミングが皆さん町民の間で大きく違っていたんじゃないかというお話をさせていただきましたが、この対話の場の課題であるとか、議題設定について例えばなんていうんでしょう、丁寧に、何についてそもそも話すんですかというような問いを設定することを参加型でやるっていうことも可能性としてはあったのかな、という風に考えているんですけれども、この議題そのものを会員同士が丁寧に議論したというプロセスも私達にの中では、あの分析では観察できなかったという風に考えています。
　またこの当初の会則案に関する議論のところでも紹介させていただいた通り、意見を言いにくいような環境があったっていうことも、かなりの数寄せられているという風に感じていて、参加者1人1人が意見を話すとか他者の意見を聞くっていったような双方向のやり取りが表面的なもの

であったり、限定的なものにならざるを得ない環境であったというふうなことが想像できるというわけです。

慎重派の意見がファシリテーターに無視されたように感じたというような証言もあったりなどなど、私達にとってもこれから検証したいという風に考える要因がたくさんあるんですけれども、こうした内容から対話の場に実質的な双方向のコミュニケーションがあったのだろうかというふうなところでいくと、このコミュニケーションの双方向性という観点からすれば、不十分であったという風に考えています。

対話が、場ばかりで、地層処分の勉強が目的なのであれば、コの字型で場を設定するんではなく、正面を向いて学んだ方が良かったんではというような率直な意見も得ており、本来に住民町民の皆さんが対話というコミュニケーションに期待したことが叶わなかったということも推察されると考えています。

町のあり方に関する対応については、町作りのテーマのグループワークでは参加者同士話すようになったであるとか、盛り上がってきましたというような内容の、評価するようなインタビュー証言もあるにはあるんですけれども、この点についてもこのはいその評価する分析とはまた異なる意見も聞かれています。

町作りの最終処分事業を実施主体とともにまち作りをすると話をするっていうことは、交付金の問題と切っても切り離せないことだというふうな話は対話の場の会議録の中でも観測されますし、振り返りの中においても違和感があるというふうな声が寄せられています。このテーマについてもたくさん意見が出たっていうような評価もありますが、実際のところどうだったのかということは今後も見ていかなければならない点だという風に考えています。

この、ここまで示したように、寿都町の対話の場についてはリスクに関する情報提供が事業者から側からのみしか行われず、当初の会則案2の中では一つのリスク判断に対する受容を求めるような書きぶりがあったこと、それから双方向のコミュニケーションということも不十分であったのではないかということがうかがえる、という風に私達は分析しています。

こうした対話の場の運営というものが、まさにこの、国やNUMOから手助けもなしに押し付けられたという声がありましたけれども、このいわゆる手助けとして対話の場が機能したという風には評価できないという風に考えています。むしろ賛成派の意見は採用して慎重派の意見は採用しないというような運営があったり、またはこうあったと言い切れないにしても、参加者にとってそう感じられたという風にするのであれば、町民の間に広がっていた不安や分断をより深めたという可能性を強く疑うべきであるという風に感じています。

この2024年2月3月に行われたインタビューの中でも、反対派の人とは喧嘩になってしまうので会話できないとか、反対の意見の人とはあまり話をしないとか、外から見ると分断が起きてしまい対話どころではなくつらい、地域の分断が始まってから対話することが難しい、といったように、対話の場の経験者自身もこのコミュニケーションの課題っていうのはあんまり越えられていないというふうなことが理解できます。

こうした内容を踏まえて、そうですね、また2024年6月時点での地域社会の現状についてこのような証言も聞きました。町内で行われた勉強会においても、明らかに賛成派と反対派で座るテーブルがわかれていて、またこれかという風に意見が交わらなくて残念に思う気持ちとともに、

当然そういう風に席がわかれる形になるよなと思ったと、自分も賛成派ばかりのテーブルに行くことが怖かったし、反対意見を表明している私と座りたくないだろうなという人の気持ちも想像できた。

みんなそういう風に嫌な思いをしたくないから、こういう場に出てこないんじゃないかなと思う。という風にあって、この対立や不安が解消できない現状であるとか、この問題についてまだ語れないというような深刻な状況は、現在も確かに存在しているという風に思われます。

このような分析を通じて、私達はこの対話の場ということが不十分であったというふうなことを分析しています。また不十分であったという風に評価するのみでは収まらないような、まだ具体的な学術的な目線であるとかそういうことでは分析、整理しきれていない内容もあるなという風に感じています。

残された問いとして書かせていただきました。ぜひ皆さんとともに意見交換したい内容でもあります。この一つ目の問いは対話という表現の使用に関してです。この寿都町対話の場は対話という言葉に含まれているというふうな当プロジェクトが感じている相互作用的な変容であるとか、それから事業内容への意見の反映といった成果を前提としてはいない。そして実際にはNUMOによる説明と説明事項の理解促進を施行された場だったんではないか。ということでこうした進め方への反省から、NUMOが行っている振り返りにおいては先ほどご紹介のあった通り留意事項ということが求められているんですけれども、基本的には責任主体がどこかにあるということが、はいありません。であるとするならば題目を対話の場という風に表現して、常に公平な対話が行われているような印象を与える表現を使用するし続けるということは適切なのかという問いです。

そして問いの二つ目はこれまでの対話の場がもたらした影響に関する検証と対応という視点です。この今行われている振り返りにおいては、この今後2024年8月以降実施される対話の場に生かしていくというふうな目的で振り返りが求められています。ですがこうしたこの寿都町民への負の影響があったのかどうかという視点についてはまだ検証がされていないという風に感じていますし、この分断状況にどのような影響を与えたかに関する認識についてはまだ明らかにされていないと考えています。そのはい私達のプロジェクトとしては、この検証を分断に関してどんな影響を与えたのかということについて検証をしてほしいと、はい。そして法令に関する認識を明らかにするとともに、早く分断状況の早期解決や再発防止のための取り組みを図る必要があるんではないかという風に感じています。

また問い３としてはファシリテーターの責任や倫理という風に書かせてもらいました。この対話の場のあり方というのがしばしば、両方のいろいろな立場の間に立つファシリテーターの技量によって左右するという視点からも語られることがあるのかなという風に思うんですが、運営者側の対話の場の運営者自体が相互作用によって自らのタイプの変容をしていくっていうことを前提としてないとするならば、あくまで運営者側の目的を推進する役割にとどまってしまうのではないかというふうな懸念も持っています。このような建て付けの場のファシリテーターを務めるということそれ自体がどういう意味があるものなんだろうか、ということも問いの一つであります。

四つ目は神恵内村の対応の場合の検証です。この本稿の三つの視点がございましたが、それをもとにすれば神恵内村での実施内容についてはどんな検証ができるだろうか、ということ。

そして問い５は地域に禍根を残すプロセスについてです。対話の場のやり方が良いとか悪いとかという事を話していく前提には、最終処分事業の建て付けというのが必ず関わってくるということがあると考えています。この事業に内包されている様々な問題があってそれに起因する葛藤や混乱がある。それを地域社会に引き受けさせるという方法が今とられているという風に考えるんですけれども、このようなやり方でこのまま書類選考を進めて良いのか、これらのことが残された問いとして、私達プロジェクト自体もそれから社会としても一緒に考えていきたいと感じている内容でございます。

まずはお聞きいただいてありがとうございます。ここで私の報告は一旦区切りとさせていただきます。（拍手）

司会宮本奏　01:27:31（14:57:31）

はい。宮崎さんありがとうございました。たくさんの視点、検証の視点があったかなという風に思います。皆さんの中にはどんなところが心に残ったかなということが知りたい聞きたいなという気持ちでおります。はい私自身もファシリテーターと名乗って仕事をする1人の人間として、その問題は本当に一緒に考えていきたいなという風に思って聞かせてもらいました。

この後ですね、後半はちょっと皆さんにどんな風に感じたと思ったっていうことを少しお話できるような時間を取っていきたいなという風に思っています。ただその前にちょっとわずかではありますけれども、5分ほど休憩を入れて、5分なので3時2分にはまた再開して、ちょっと感想をお話できる時間に入っていきたいと思います。では、5分休憩取りたいと思います。皆様お疲れ様でした。

すいません。向こうのドアの方に飲み物とお菓子とか飴がありますので、適宜お口に入れてお試しください。

（休憩／管理人さんへの室温調整依頼・冷えすぎ）

司会宮本　01:33:14（15:01:23）

それでは、皆さんお戻りでしょうか？ちょっとわずかな休憩でしたがよろしいでしょうか？

ではここからですね、今度はちょっと皆さん、今日来ている参加者の皆さん同士で少しここまで聞いていて感じたことや、ちょっと聞いてみたいなと思ったこと、どんなところがあったかなっていうのを少しお話できる時間を作っていきたいなという風に思っています。ここから、対話の場の今見せていただいている見解の話について、この内容についてぜひ、ここに書きましたが、感じたことや聞いてみたいことはどんなことでしたかということを、今からちょっと近くではないので少し近くに寄っていただかないとこの構造上難しいんですが、3人ぐらいかな、はい3人か4人ぐらいでちょっと近くの人ちょっと目をキョロキョロしてですね目が合ったななみたいな

3人がもし見つかれば3人か4人ぐらいで、ちょっと感想やお話をできる時間をはい5分ちょっとぐらい取りたいなという風に思っています。

ぜひお話をしながらですね、今日の資料の中に紙が実は何枚か入っていまして、白い紙資料の中にあると思います。白い紙ですね見解の内容についてちょっとこれ聞いてみたいなとか質問してみたいなと思ったことがあれば、ぜひペン等を使って大きく紙に書いていただければと思います。もう1枚紙が入っていて、今度緑色の紙が入っています。こっちの色付いてる紙には質問ではなくて感想という風に、感じたよという感想をぜひ聞かせていただきたいなと思います。

これいただいて、ちょっとみんなで見えるようにね、貼ってみんなで共有できたらなという風に思っています。実はもう1枚小さめな、ちょっと同じような青っぽい感じではあるんですけれども、サイズが小さい紙が入っていて、これは第3部で使うようなので、ここではちょっと使わないでのけておいてください。今使うのは白い紙と、この緑の紙。質問と感想をお書きいただくというところで、ぜひ使っていただけたらと思います。3人4人で話しながらちょっとこれ聞いてみたいねっていうのがあったら書いてみる、そんな時間を取ったらと思いました。

では書けたらですね、お話の最中でも結構です。私や津田が回るので、書けたよっていう風に渡してもらえたら見せていただいて回収したいなと思ってます。では、ちょっとお近くで3人とか4人ぐらい少しお話できる距離をちょっと動いていただけたらと思いました。やっぱり動かないと、自分が動かないとちょっと近くに行けない構造になっておりまして、後ろ見たり横向いたり、何となくできたらできたかなと思ったらぜひ

感想を始めてみてください。

【会場：書いたり、感想を述べあったり】

宮本 01:43:12（15:11:21）

お話の中で出てきたことで、ちょっと聞いてみたいなとか質問がね一つでも二つでもあればぜひ紙に書いていただけたらと思います。せっかくの時間やり取りできる時間とりたいなと思います。もし質問をかけた紙があるよという方がいたらぜひ教えてください少し張っていけたらなという風に思ってます。手を挙げて教えてください。

はいではそろそろですねちょっと全体で出てきた質問を見ていきたいなという風に思います。まだ書き途中だったりとか、ちょっと書きたいなという方がいらっしゃったらぜひ書いて手渡してください。

宮本 01:46:32（15:14:41）

ここからはですねちょっと出てきた質問に対して宮崎さん答え答えられるかなと。答えたいなと思うのでちょっと選んでいただいていきたいなという風に思っております。あともうひと方、この時間から寿都町民の会の事務局の東田さんに同席いただきます。よろしくお願いします（東田さん；おねがいします）

では、今、宮崎さん見てくれておりますが、出てきたのはねいくつかありまして、例えば特にそもそも対話の場とは何だろう、何かっていう、とあったりとか、ファシリテーターと公正中立

を実施することは何だろうか。誰に対して公正中立であるべきかといったファシリテーターとか対話の場に対するちょっと質問が出てきました。ここに関しては、この実はこの後の第3部において、対話やファシリテーターにちょっとそこにフォーカス当てた時間を作ろうと思っているので、そこはこの手の質問はそっちに繋げられるかなという風に思って見ていました。

宮崎　01:47:39（15:15:48）

ありがとうございます。今宮本さんに読んでいただいたそもそも対話の場とは何か、あるいはファシリテーターの公正中立と誰に対して公正中立であるべきなのかという点に付いてですが、はい、まさに宮本さんいただいたように第3部で一緒に話していきたいなっていう問いだなという風に感じています。今回核のごみに関する対話を考える市民プロジェクトとしてはそもそも対話の場とは何かということについて対応はどうあるべきかみたいなことは、なかなか定義がしづらいということは書かせていただいた通りです。

広辞苑を引くと対話って相対して話してることぐらいしか書かれていなくて、一緒に話してれば対話だという風に言うこともできるっていうことは何か日本語の言葉遊び上あるんですけれども。それからリスクコミュニケーションの研究の蓄積の中でも、対話っていう名称を使って行われている取り組みが…分析がされてきたという中で、私達市民プロジェクトとしては対話ってものすごく、冒頭にも書かせていただいた通り、私達にとってはすごく思い入れのある取り組みだっていうふうな前提があるので、はい、この対話っていう名前のついている取り組みで、何を目指したらいいかねっていうことは、はい、投げかけたい私達自身も投げかけたい問いです。

司会宮本 01:49:30（15:17:39）

二つ目の問いに行きます。分断状況を助長した責任の所在っていうことが私達の見解の29ページで書かせていただきましたが、どこに責任の所在があるのかっていうふうな問いなんですけれども、この所在を追及すべきまたは追求したいと考えますかという問いをいただきました。

宮崎 01:50:02（15:18:11）

私達プロジェクトの中ではまだ答えが出ていない点かなという風に考えます。意見お手元の参考資料の中に2っていうものがあって質問状であるとか要望書を、7月19日に出させていただいたものでそのコピーをはい、皆さんのお手元に配らせていただきました。

この内容の中では対話の場の更なる検証を求めるということで、資源エネルギー庁またNUMOに対話の場のさらなる検証してくださいというふうな内容ではい、要望を求めているというふうなことがあります。私達としてはこの要望書を出した思いとしては、この地域分断状況を助長したことがあったのかなかったのかということをまずは検証してくださいというふうな趣旨で要望書を提出しております。その上でそういうふうな影響を与えたのかどうかっていうふうな認識を公開していただくことで、これから例えばもし分断っていうことがあったとするならばその解消のための取り組みを早期にしていただきたいという風に考えましたし、今後玄海町だとか文献調査に新たに手を挙げている自治体さんもありますが、そこでまた分断が起きるっていうふうなこと、再発があるってことが起きないように対処いただきたいという趣旨で、この分担という事柄について検証を求めています。

なので分断状況を助長したのかっていうことについてはぜひ認識を明らかにしてほしいという願いはありますけれども、その所在が例えばNUMOなのか町なのかっていうことについても積極的に私達が追求したいかというと、まだイエスとは強く答えられないという状況です。

東田秀美 01:52:13（15:20:22）

町民の会事務局の東田と申します。よろしくお願いします。私達の立場で答えられることとか答えた方がいいことも今回質問の中にはあるだろうということで、当会の方から事務局として相談させていただきました。よろしくお願いします。

今の分断状況を助長した責任の所在については、会としては何度も要望書ですとか、公開質問状で、そもそもの対話の場を作るときのグループのことだとか、会則のことでこれは誰が作る場所ですか、どんな風に作るつもりですかこういった形で公開していってほしいということも含めて、全て今まで質問も要望を出しております。ただ、残念ながらNUMOと経産省と町の方から来た回答には、それは対応できないという回答で、町とNUMOで作るという風になっておりますので、もし今回の見解であった通り、町が主催者でありNUMOが支援者であるならば、もし町がそのように言ったとしたら業務はきちっと公開すべきだという風に支援して欲しかったし、伝えるべきだったと私は思っていて、うちの会（町民の会）もそのように思っています。

どちらが主体であるかは町だったんだろうという風に思いますが、支援の仕方というのはあると思っていて、だったらなぜNUMOは対話という言葉を使いながら、非公開であり参加者も限られていて、傍聴もできない、議事録も公開されていないという場を支援しているんでしょうかと、私達は思う。

私達はそれは私達町民の会の見解なので、市民プロジェクトさんとはまた違うと思います。私達は分断を実際に経験して具体的にその街で暮らしている人たちの会だから。ただ私達自身の考えが正しいかどうかは、また広くね、今回、私達は私達自身は当事者だと思っていても、今回市民プロジェクトさんは市民全体が国民全体が当事者だと思って今回見解を作ってくださったと、私達はとても感謝してるしありがたいと思っているから、その中でどうなのかっていうことを改めてちょっと考えたいなとは思います。

司会宮本 01:54:38（15:22:47）

はいありがとうございます。ちょっと他に出ている質問を読み上げてみますね。読み上げていく中で、もしと思ったら声を出してください。出ている質問です。質問というよりご意見かな。双方向コミュニケーション難しいよね。会議と対話は違う。対話をしないで済んできたやり方はというはてなマーク。子供を育てることで不自由から対話の必要性を痛感ということがあります。そして対話の場のファシリテーターはどのように決めたのか、ギャラはどうなってるんだろうか。対話の窓口にくっついていて…

東田

くっついて、はい本当に不思議だなと思っています。

司会宮本

どんな経緯でね、決められたのかというところは聞きたいな。そして対話の場の公開は求めないですかという質問や、対話の場はそもそも対話にならないものになっていないのか。そもそも対話にならないんじゃない。というようなご質問もありました。

宮崎 01:55:39（15:23:48）

ではちょっとお話してみます。対話の場の公開を求めないですかという視点なんですけれども、ここは自分が普段ファシリテーターをしているという視点からも少し今回の見解でどういう風に分析したらいいか表現したらいいかってのはすごく迷ったところでありました。安全安心な対話の場を作るために参加者のが率直に話しやすいようにむしろこの対話の場で話されたことはむやみに外に公開しないっていうことはよく配慮してやることであるなという風に自分たちは思っていますので、同じ理由で参加者の意向を配慮してということで寿都神恵内　寿都長においてはまず議事録の詳細は誰が発言したかということも含めて非公開になっているっていうふうな内容になっていいます。

とはいえ先ほど東田さんもおっしゃっていたように、公募はないんですかとか、傍聴はないんですかとか、誰でも参加できるのではないんですかみたいなことについては、建て付けとしてそもそも対話の場の目的を振り返れば、町民が自分たちで考えられるとか、それからあの意見を反映するってことが基本方針の中でもありますので誰でも参加できるような場にするべきだったんじゃないかということは、思うところの一つでもあります。

ちなみにこの、こういった多様な参加者が含められるようにこれからはしていこうというふうな趣旨で今NUMOさんの方でまとめられているこの留意事項集っていうのが、あります。これがこれから先日の特定放射性廃棄物小委員会の議論を踏まえてこの現時点のまとめっていうのがこれから公開されると思います。ある種ハンドブックのようなものになっているんですけれども、そこにはこういう風に多様な参加の枠組みを整えることが留意事項として書かれているというのはあります。それをどういう風に運用していくのかっていうことがハンドブックには書いてありますけれども、それをどうやって現実のものにしていくのかっていうことが事業者あるいは私達も見守る。見守るというか、この問題を見つめる国民の側にも、はい問われていると考えています。

宮本奏 01:58:32（15:27:03）

はい。あの公開ということをどう考えるかということで一つはい、質問が出ていました。
そして見解の内容についてというところにも質問が出てきています。7月19日付けで出された要望書への回答、7月29日までにとなっていましたが、回答はなされたのでしょうかという質問もあります。

宮崎汐里 01:58:54（15:27:25）

はい、お答えしたいと思います。こちらについてはメールの方で経産省さんとNUMOさんからご連絡をいただいています。7月29日までの回答は難しいということで組織としての方向性が決まってから連絡しますというふうなお返事をいただいています。

ちなみに先日8月1日の特定放射性廃棄物小委員会の中で経産省さんNUMOさんから少しですねこの報告の内容を私達の要望書や見解についてのお考えということもお話の中でしていただいて

います。一部を紹介するとすれば経産省さんからは地域の分断についての検証という点については正直申し上げて、当事者でもある国やNUMOが行うことが適切だとは思いませんということを率直にお答えいただきました。ですが、今後こういうパブリックインボルブメントであるとか、パブリックコミュニケーションであるとかそうした観点での学術的な分析もなされていくこともあろうかと思いますので、そうした分析についても今後の取り組みには生かしておきたい。というふうな回答というか意見を委員会の中で聞かせていただいています。

また委員の意見も踏まえまして、ですね、この分断っていう言葉については少しその言葉の使い方について委員委員の皆さんからいろんなコメントあったんですけれども、委員会の最後には、経産省さんの方からこの分断っていうふうなことについて、単なる言葉だけではなくて地域でどういうことが起こっていて、どういう風に沿っていけるのか、対応していけるのかっていうのをしっかりと考えていきたいというような発言がありました。またNUMOさんから有形無形のストレスがあるということを認識すべきということが委員から指摘いただいたということで、そういう状況にならないようにするために対話活動になり、対話活動をどんな風にすべきか考えていくっていうことを発言としては聞かれているというのです。それをどういう風に国民として見つめていけるのかということが私達に問われているのかなと。

司会宮本 02:01:37（15:29:46）

はいありがとうございます。もう一つ、おそらくその委員会に関連してなのかなと思うんですけども、町とかNUMOとかのファシリテーターへのインタビューというのは行っていたのでしょうか？ちょっと難しいとは思いますがというご質問もありました。

宮崎

はい。事実としては今回は行っていませんという答えです。これから今回その見解については、中間的なまとめということで出しましたけれども、今後必要に応じてはい。このインタビュー、ファシリテーターの方や町民委員の方にもインタビューっていうこともできる限りやっていきたいと考えています。

司会宮本

はいありがとうございます。では今度寿都のことについてちょっとご質問がありました。住民の方々から現状に対して、こうすればよかった、こうしたいという声は上がっているのでしょうかというご質問。そして一つ、なぜ文献調査を受けたのだろうか。なぜ知事は反対しているのかといったご質問もありました。こうすればよかったこうしたいっていう声も上がってますか。

東田 02:02:59（15:31:08）

私は町民の会の事務局なので、町民の会の中ではいつもそういう話にはなりますけれども、会として例えば、さっき言ったくっちゃべる会とか様々な勉強会をやった後に賛否も含めて議論できてるかというと、それはそう、まだそこまではいってないと思います。

町民の会のメンバーは、当然元々文献調査そのものに、町長が手を挙げたこと自体に対して、なぜ町長は町民と話をせず、議員と話をせず勝手に上げたのかというと声を上げたのかというところと、そもそも法律として町長が勝手に手を挙げられるという建付けであることに対して、大

変な不思議感疎外感、違和感をずっと感じているので、もちろんこうしたいとかああしたいっていうのはいつも話はしていますけれども、まずはそこを原点としてそこへの違和感がまずあって、はい、もちろん対話の場の作り方多様な場に参加しているメンバーからの様々な意見っていうのはもちろんあります。

また、対話の場だけではなくて勉強会に参加するメンバーもいるので、はい、いつもみんなで話します。それが町民広くみんなで議論になっているかというと、今はまだ残念ながらそこまでは行っていない。なので、くっちゃべる会をつくる努力をしている。やっと少しずつですけれども例大祭という寿都の方で大きな神社祭のお祭りがあって、去年、今年あって少しずつですけれども乗り越えながら、話ができているような気がします。ただそれは、この問題を介して話せてるわけではなくて、はい、違う部分でずっと対立してるってつらいんだよ。だから、少しずつ生活の中で交わるようになってきているかもしれないなと、はい、そのぐらいの感じですかね。

文献調査に応募したのは、なぜですか？（ですか、というニュアンスで）

司会宮本 02:05:09（15:33:18）

そうですね、文献調査、なんで、なぜ受けたのか（ですね）。

東田

わかりません。町民の会としてはどうしてでしょうねって。それは町長に聞いてください。もちろん要望書もたくさん出していますし、公開質問状も出していますし。
けれども、私達自身が納得した答えが返ってきているわけではありません。町長が自分の判断で出しました。

宮崎 02:05:31（15:33:40）

はい市民プロジェクトとしては報道などで観察されている町長発言を見解資料の13ページにまとめさせていただいています。そちらから伺い知れることもあるのかなという風に考えます。ですが例えば本当に至るところで様々な理由を述べてらっしゃるるのかなと思います。まず2020年8月の町長発言としては、一番先に文献調査に手を挙げて概要調査までの交付金90億円をゲットすればそれで私の町長の使命は終わりで、最後まで行くつもりはありません。というふうな形で交付金目当てということが伺い知れるような発言されていると感じています。

それからその他、国において解決が見いだせていないこの大きな問題に一石を投じたいというような理由も述べていたり、あるいは概要調査でボーリング調査が行われるっていうことに紐づけて胆振東部地震で地震の被害のすさまじさを見せつけられて、寿都の足もと大丈夫なのか、地震を確認したいねと話したというような発言もあります。というふうな形ではい様々理由なのでやっていいかなと。

なぜ知事が反対しているのかについては、現在北海道知事を結ぶ記事は核抜き条例というのを根拠に、この文献調査を受け入れ時点からはい。反対ということをおっしゃっているかなという風にはい。

司会宮本 02:07:32（15:35:41）

ありがとうございます。一応ここに出てきた質問に関しては一通り読み上げさせてもらいました。ちょっと最後になるんですけれども、ここまでの見解の報告ややり取りを聞いてコメントをちょっとお2人からいただきたいなという風に思っております。お1人は北海道大学の川本思心先生からここまでのやり取りで伺いたいと思います。マイク回しますね。

川本思心先生 02:07:57（15:36:06）

はい、ありがとうございました。はい北海道大学の川本といいます。報告ありがとうございました。本当に大変な状況でいろんな方にお話を伺うということだけでもまだ何ていうか心落ち着かないというかそういうこともあるかなという中で、こういった活動をされてる。本当に敬意を表したいと思います。まさに対話とは何かというところのお話がありましたけど、私も対話が何かっていうのは科学コミュニケーションを専門にしてるので常々考えているところですけども、やはりお互いに変わりうるっていう確信だったりとか、そういう信頼っていうものがあって初めて、対話っていうものを考える言葉っていうのは使えるのかなという風に思っています。

どうしても対話・コミュニケーションっていうと、表面的なやり取りとか、上手な場の持ち方みたいなそういうところに矮小化されるんですけれども、そういったお互いが変わりうるっていうことを前提にするならばやはりもっと前、前段階で何を議題とするのかとか、何を目的とするのかっていうことをやっぱり一緒に作っていかないと、決してそういった信頼関係ってのは生まれない。そういった点で今回のこの問題はもう簡単な話で、最初からおかしいっていうのをこれははっきり言って誰しもそう思うんだろうなっていう、そう思わない方もいらっしゃるかもしれませんけど、私はそこは強く思ったのは大前提としてあります。

その上でその対話コミュニケーションっていうのが、先ほど言った理念的な定義でしたけれども、何がどの程度達成できたらその対話なのかっていうところですね、それは結構よく考えるところです。それがですねいつまでっていうタイムスケール的な部分っていうのはあると思います。

信頼関係を作っていくってなると、単に場をどう回すかじゃなくてそれ以前だったりその後だったりっていう、いろんな長いプロセスの中でいつ何を達成していくのかっていう考えがやっぱり必要になっていて、そこがこの対話という語、キーワードだったり、あるいは様々な技法を使ったワークショップのやり方っていうのが導入されるようになってきて、今回いわゆる実施側がそれをやるというところがあったわけですけれども、そういったやり方ということ自体が導入されたことがある面前進なのかもしれませんし、ちょっと話がそれるかもしれませんけれども、こういった科学コミュニケーションやってですねやっぱり我々が目指す方ってすごく大きな目標というか、遠い目標を目指していく活動だと思うんですね。それでコミュニケーションってこうやればうまくいくなんていう話じゃなくて、より最悪にならない道を何とかちょっとずつ前を探すという、そういうものだと思うんですけれどもそういったときに、やっぱりどうしても足りないところがもっともっと直していかないといけないっていう議論になるんですが。一方で、我々人間なので、やっぱりできてるところ良かったところっていうのをやっぱり同時に探していくっていう活動をしていかないと、なかなかそこに新たに加わってくれる人がいたりとかちょっとだけは良くなったよねっていうことを示していくことをしないと、やっぱり周りからもそもそもああいう業界は意味がないっていう風に評価されがちになるっていうのは、今回の件ではなくてですね私

自身の経験としてあるところであります。だからいわゆる対話をしてみたいな形でですねなってしまっては決していけないんですけれども、一方で何かわずかでも前進があったところは何なのかっていうところを利用されないように、極めて慎重に考えつつですけどもやっぱりそういうやる必要があるのかなと。

その上でちょっと話がちょっと回り道しましたけれども、その上で今後こういった対話っていうものがいくらか可能性があって、さらに第三者を評価していくっていう形式が一つのモデルケースになりうるのか、それでもやはり主催者がやるということはあまり適切ではないというかうまくいかない部分があるのかっていう、おそらく私の考えとしては様々な人が色々活動して相互に参照し合うっていうのが必要なのかな思っていて、今回の活動は非常に素晴らしいものだなと思いますし、もし可能だったらやっぱり、町・NUMOのファシリテーターの方は正直知り合いでもあるので、やっぱそういう方もこの場に来て、そこの問題ありますけれども、一方でそのファシリテーターとか繋げるっていう仕事、専門性を持ってる人が話し合うっていうのができるようになってきたらいいのかなという風に、ちょっと理想としてですけども思いました。はい、ちょっと長くなりましたけど以上です。

宮本

はいありがとうございます。ではせっかくなんでもうひと方。はい大阪大学の平川秀幸先生、はい、お願いします。

平川秀幸先生 02:13:44（15:41:53）

大阪大学の平川です。立派な報告をしていただきましてありがとうございました。今回のことはですね、最初の方でもちょっとおっしゃっていましたけれども、基本、別に地層処分の問題そのものに関して賛否を問うって話じゃなくて、まさにその対話のあり方は、今、川本先生もおっしゃってましたけども、その対話のあり方としてどうなのかっていうことを検証する取り組みとしては非常に重要な取り組みだと思うんですね。まさにその第三者的な立場から実際に行っている対話のプロセスというのを検証してみる。そういう観点から特にその対話の原則論というかあるいは対話のお作法、お手前お作法の観点からその現在のその対話というのはどうなっているのかということを検証してる事例として、非常に重要だと思いました。

特に今回検証1から3まで上げてる話はまさにその対話がどうあるべきなのかどうあるべきだったのかっていうことを検証する上でかなり一般性のある、特にそういったリスクに関するその情報提供のあり方に関して冒頭の方でもご紹介しましたけども、特に福島の事故以降というのは一般市民、普通の庶民の生活者の目線から見ても、一方の専門家だけの話を聞いたら何かまずいよねという感覚ってのは本当の肌感覚としてあるので、そういう社会になっているってことを考えると、例えばその国あるいはNUMOさんみたいな事業者の立場から見ても事業者としてはその事業を実現したいという目的を持ってるのが大事だと思うんですけども、その目的を立てた上でも、やはり対話を通じて何かを一緒にみんなで考える結論を出すということをやるときには、やはりその現状の庶民の感覚としての両方の立場を聞かないと答えてないよ、自分で考えてみたいよって

いうことにちゃんと配慮するということ。基本的にはこれですって根本的には自己決定権の問題だと思うんですね。自分でちゃんと決めたいのは当然ながら専門家ではない。

両方の専門家の話を聞いたからといって、直ちに何か専門的に詳しい正確な判断ができるっていうわけではないですけれども、やはり町民1人の人間として何か一方的に押し付けられるんじゃなくて、とりあえずちゃんと自分で考えて答えを出したいっていう気持ちはやはりそこが持つものだと思いますので、そういうところをちゃんと配慮する、これはまさにこれは民主主義の根本だと思うんですけども、そういう観点からその対話の原則の作法というものを考えるということが非常に重要だと思います。

そういう意味で、何かさっきの川本先生の話とかぶるんですけども、対話のあり方そのものを当事者の人たちも含めて特に今回の場合、寿都の例をその当事者たちもまさに加わる形で対話があるあり方として、こういうところが実は問題だったよね、特にその原則の中で今回の検証の報告書で出てきたように、実際、地域での分断とかそういう法律であるとか、何かそういうこじれた関係ができてしまっているというのは、本当にリアルな問題が生じているので、その観点からその対応のあり方はどうあるべきだったのか。また巻き直すとしたらどうできるのかっていうことを第三者を交えて、さらにその事業者の方は進めたい側と、あと慎重な立場あるいはこの第三者の立場から対話のあり方として検証する人たちも交えて何か一緒に改めて対話の場を仕切り直すための場いうのを何か作れたらいいんじゃないかな、と思うんですけどそのあたり、そのあたりの可能性もこの後何かお話伺いたいと思います。

その際にその対話の原則を作法としてみんなで共有すべきものは何なのかっていうことを今回の経験・教訓を踏まえる形でみんなで共有していくと、なお一層こうあるべきだね今後はこうした方がいいねってことについての共通了解といういろんな立場の間で取りやすくなるのかなと甘いかもしれませんけれども、ちょっとそのこともありました。以上です。

司会宮本 02:18:27（15:46:36）

はいありがとうございます。私もいくつも今すごく心に残ってる言葉をいただきました。対話で何を実際達成するんだろうかという問いであったりとか。そもそもやっぱり建て付け最初からねおかしいっていうところもあるんじゃないかっていうことや対話のあり方をやっぱり第三者が見る評価するっていうことで仕切り直すということができるんじゃないか。そして対話を自己決定権というところから見ていく。何かそんなところが私はとっても良いことを聞かせてもらいました。はい、ありがとうございます。あと2人からはよろしいですか。

東田 02:19:11（15:47:20）

ありがとうございました。その話を聞いて、町民の会側、私は本当は町民の会側だから誰が仕切り直すの？　皮切りを作ってくださるんだろうか。それはやったNUMOもしくは町役場に仕切り直す最初のきっかけが、それこそさっきの責任があるのではないだろうか。私達は、じゃあ、ただ待っていれば、その仕切り直しがのタイミングが来るんでしょうか？　誰がいつ？っていう風に、可能性があった方がいいとか、可能性があるといいなっていう幸せな未来とか、さっきの

何ができたかっていうことを良い方だったところを見ていこうよっていう思心先生の話とかは、ある意味わかるんだけれども。

え、それってちゃんとあれやるのっていうのを、いつやってくれるのっていうのと、私達の分断は、今日いま、今日の夜からまた始まっている。はい今日私達が既に帰ったら、もうそこから始まっているこの現実の中で誰がやってくれるのかしら、私達がやるのかしら、私達ができるのかしら。なかなかこれはですね、町民の会側としては本当に今、今日ここで起こっていることは寿都で、どんな風に受け止められていて、子供たちが持ち帰って、どんなものになるのかっていうことが見えちゃう部分がどうしてもあって、はい、なかなか辛いですね。それが私達の宿題として、持ち帰られされるんだろうか？みたいなところもあり、もちろん今日はね一つ一つに対して、解決できないものもあるよっていう話は、吉田先生からも何度も伺っているけれども、やっぱりやってる側としては、、、、はい、答えを急げないことだということはよくわかってるつもりです。

私自身も外れていたという仕事をたまにしますから。だけれども、分断が起きているその場に立っている側として、はい、どうすればいいんだろうかっていう背景も、逆に浮き上がりました。すみません。こんな答えで。

宮崎汐里 02:21:37（15:49:46）

はい。私自身も先生方のコメントはい、ありがたくてお聞きしました。そうですね何て言うんでしょう、私達先ほど川本先生のお話からこの問題自体最初っからおかしいっていうことがお話をしていただいていて、時系列としては、私達市民プロジェクトが後からおかしさに気づいたというようなところもありまして、このおかしいっていう風に感じている今のところそのいわゆる関係者でない外部の立場にいる私達、北海道人といったらいいのか、この場に関心を持っている人がおかしいって思ったことをどういう風に是正していくっていうことに貢献できるのかということに、私はすごく関心があるという。あります。

先ほどの専門性を持っている人々が繋がるっていう仕事も必要なんじゃないかという風にあって、まさにそうだな思っています。これから例えば、文献調査の実施自治体はどんどん全国で増えていくという風になったときに、同じようにファシリテーションだとか科学技術コミュニケーションの専門家と呼ばれる人たちがこれからファシリテーターとして招聘されるのかなという風に考えるんですけれども、そういう立場にある私含め人々が学び合うっていう仕組みがないと、公正な場作りっていうのが実現しにくいというか、実現しなかったっていうことがもう言葉で言うと簡単なんですけれども、先ほど町民の会の事務局東田さんからもあって、実現しなかったということでその地域の人々に与える影響が大きすぎるっていうことが、そういう影響を知っている私達が場作りっていうのも考えていけるのかってことが、私も考えたいなと思って。

まさに第3部こういった対話の場とはどういう風に作れるのかとかファシリテーションということをどういう風に考えていけるのかっていうことを引き続き議論をしていくっていうことになっていくと思うので、今先生方からいただいたことについて一緒にぜひ第3部で考えていきたいという風に思います。よろしくお願いします。はいありがとうございました。

司会宮本 02:24:51（15:53:00）

　では第二部はここで終了したいと思います。皆さんからいただいたこの質問や、そして感想については、会場のどこか前を見えるところに置いておきたいなと思っています休憩お帰りの際にぜひ並べていただけたらと思います。では、すいません、第3部の時間をちょっとをいただいてしまいました。ここから少し休憩を入れて第3部に入っていきたいと思います。

改めて会議はお疲れ様でしたありがとうございました。

吉田 （15時54分頃）
　皆さんお疲れでしょうか？切りが良く16時から第3部に入りたいと思います。その間、体をちょっと休めたり、あそこでお茶を飲んだりしてください。

・・・・・・・・・・　第３部　・・・・・・・・・・・

進行吉田 00:28（2:31:49　16時28秒とみなす）
　お時間になりました。お席にお戻りになって水色の紙に、二、三分で、対話とは、対話の場とは、そして三つ目が、ファシリテーションやファシリテーターとは何かということについて、質問ではなくて我思うというところについてお書きになってください。
　それを書き上げたならば、そのあと先ほどもやったように隣近所で、それをもとにして、やはり六、七分ぐらい喋ってください。それが一通り済んだら、それをウォーミングアップとするならば、次は意見の重ね合い、という形にしたいと思います。

進行吉田 01:21（16:01:21）
　では、3分間お書きください。
　それでは未完成のまま未完成で結構ですので、隣近所さんと先ほどやってたように皆さん方おしゃべりしてください。6分ぐらいで切り上げますので、一分前になりましたら、そろそろですって言います。
　はい。この勢いを次の言葉の重ね合いに持っていってください。
🔶一項目め
司会吉田 12:48（2:44:10）（16:12:48）
　よろしいですか。みんなで話し言葉を繋いでいく作業って楽しいですよ。行きます。まず、最初に対話とは何かについてです。
　連歌での発句。誰か始めに喋りたいって人はいませんか。皆さん2番目ならいいわって顔していますけれど、一番めを指定するという意地悪いやり方をしましょう。
（挙手の方がいて）マスクの方、はい、マスクの方はい。最初の発話者です。
A話者 13:45（2:45:07）（16:13:45）
　対話っていうので、私は相手の意見を理解するっていうのが対話っていう風に書いてあって（緑の紙に）、ここでグループで発表したんですけども、一番印象的だったのが、生命の存在確認

っておっしゃられていて、ちょっと自分になかったと。ただしそっからやっぱり相手がいなければ自分は対話できない、そういう意味合いは強いなって、思いました。

司会吉田 14:25（2:45:51）（16:14:25）

はい。ありがとうございます。対話とは生命の存在確認なんですね。ありがとうございます。はい、これに繋げていきましょう同じことを繋げてもいいし、違う視点からでもいいし、2番目繋げていく人いませんか？はいどうぞ

B話者 14:46（2:46:12）（16:14:46）

はい。ありがとうございます。私もちょっと近い感じがしたのでこのラインに行かせてもらうんですけれども、例えば、「白根さんが、ちょっとすれ違ってるだけだったら僕は何も起きないんですけれども、今一緒に隣に座って一緒に話すという時間をもらったことで、何かお互いに存在を意識する、この人のことを同じ生命として何かこういう良いことを一緒にしようとか生み出すってことが自然と何か自分たちの中で起きるのが生命なんじゃないかなと思う」、と。それで私は、対話とは命の呼応であるという風に言いたいと思います。

司会吉田 15:25（2:46:51）（16:15:25）

ありがとうございます。会話とは命の呼応である、ときました。はい、これに繋げてみましょう。●●さんどうですか。我々年配者として

C話者　（2:47:07）（16:15:41）

ちょっと高尚になってきましたので、私でいいのかどうかわかりませんけれども、私は理解をお互いに返しながらやり取りをしてそこで何かをお互いの立場を立場とか、いろんなことを理解しながら話し合っていくのが対話かなって思ってるんですけど、はい、すいません。

司会吉田　（2:47:37）（16:16:11）

私、●●さんたちの勉強会にもお付き合いしてるので、背景にあるものはわかる。それはですね、結局皆さん方集まってる方達皆違う考えを持っている。だけれども勉強をお互いにしていくそんな中で、違う者同士が言葉をすり合わせていく作業が出てくるんですよね。そのすり合わせていく作業をいつもされていました。はい、ありがとうございます。

はいこれに続けていってくださる方どなたかいませんか。そちらがが先ですね。名前はわからないですけど、はい、どうぞ

D話者 16:55 （2:48:21）（16:16:55）

大西と言います。対話は擦り合わせていもの。人間って結構1人ぐらいになりがちなので自分が独りよがりにならないために他の人とのすり合わせをするっていうことだったよっていうこと。

司会吉田 17:14（2:48:40）（16:17:14）

ありがとうございました。独りよがりにならないためのすり合わせという対話。はい。では

E話者 17:20（2:48:46）（16:17:20）

はい。さっき「違い」という言葉が出たので、私もすごく大事だなと思って。

違うっていうことはやっぱり前提において、目的や意図をおかずに話すっていうこと聞くっていうことによって、双方が変わっていくっていうことが対話かなという風に思います。

司会吉田　17:40（2:49:06）（16:17:40）

双方変わっていく様っていうものを見たいんですね。はい、ありがとうございます。ではこれに繋げてどなたかいらっしゃいませんか？こちらの方ちょっと見てみましょう。はい、どうぞ、いきましょう。

F話者 18:04 （2:49:30）（16:18:04）

対話とは私達人間ができる未来を作るための責任ある行為の一つとであると書きました

司会吉田 18:11（2:49:37）（16:18:11）

はい。対話は未来を作る責任のある行為であると。ありがとうございます。はいこの重い言葉を受けてどなたか、繋げていきませんか？はいどうぞ

G話者 18:24（2:49:50）（16:18:24）

私はこのグループの中で最後に話した方がちょっと時間がなくて、背景が聞けなかったのですが、対話とは我慢って書かれていて、そうだなって。ちょっとなんか楽しいばっかりではないなと思って。結構イライラしたりとか、我慢したりとか、なんでそうなのと思ってしまうんですけど、今なんか宮本さんの話を聞いたら、あ、そういう風に思うのは自分にすごい意図があったりとか方向づけたいとか、そういうのがあるからなのかなと思ったりして。

ちょっとまた最初の振り出しに戻って対話って何だろうっていう現在地です。

吉田 2:50:38（16:19:12）

ありがとうございます。でも我慢って言葉はすごく含蓄深いですよね。はいこっからまたどなたか続けていきませんか？遠方の方どうでしょうか？はい、すみません。

H話者 2:50:58 （16:19:32）

多分今日の話に引っ張られていると思うんですが、対話って言ったときには、今日の話では国とかNUMOとかそういう強い立場と住民比較的弱い立場の方が対話をしているということだったんですけど、さっき川本先生が仰ったたように、相手のことを変える、変えられるっていう機会、それが対話なのかなって思ってます。片一方のやり方を押し付けるようなものになってはいけないという意味で、相手を変えられる、変えることができ、そういう期待が期待感がある。それが対話かなというのは、私は思いました。

司会吉田　 2:51:37（16:20:04）

ありがとうございます。変える・変えられるんですね。これもまた難しい課題が出てきました。どなたか繋げてみませんか。はい。

I 話者 2:51:49（16:20:16）

はい私は話しながら本来、楽しい場だってことを対話の場について思い出しました。

定期的に寿都の私がインタビュー調査をした人も、何か、調査賛成派のエリアに聞いてみたいっていうことをとても多くあまり言われていたです。どういう考えで賛成してるのかその理由を理

解してみたいっていうことを、斜めからでなくてまっすぐ仰ってたの思い出して。あの、何でそういうふうな意見なのかっていうことがわかるだけで嬉しいっていうのがまずはあるのかなっていう風に思っています。

もう一つは、私が小さい場で聞いた話で、話す前と後で少しだけ変化があるという話を聞いて、それが先ほどの双方向の変わるっていう期待感ですね。

司会吉田　2:53:02（16:21:29）

ありがとうございます。次に続けてみる。あるいはちょっと場面展開してみたい方いませんか。それじゃ、この対話とは何に関して、まずこの段階で締めくくりにこれだけは言っておきたいってかたいませんか。当てちゃいますよ、どうぞ

J話者 2:53:36（16:22:03）

対話とはあって、あんまり問わない方がいいと思う。(司会吉田 ありがとう)

対話とは何か、私はもう対話はこうで、あなたのそれは対話じゃないみたいな分断を生み出すことにもなると思う。自分の基準で相手の対応をさばくことになるから僕は辞書的な定義というか、ゆるく話し合いぐらいでいいかなと思うんですよね。ただここに出てきたことは全部その通りだと思っていて、対話とはというよりは、対話にはこういう面がある。そういうお題だったのかなと思っています。

司会吉田 2:54:17（16:22:43）

なるほど、ありがとうございます。これは、テーマに関しては一番最初に市民プロジェクトの方のいろいろ議論していたとき、やはりこういう形に決まってきまして（吉田の主観だった可能性もある）、それはそれで大事だと私は思ったのです。でも問いの立て方で分断を生むということもあるので、これはね、考えなければならないということになりますね。ありがとうございます。これをもって１回目の対話とはに関してを終わります。

🔶 二項目目

司会吉田　2:54:48（16:3:14）

深呼吸一つしてください。次は対話の場、みんなにとって対話の場っていうのはどんなふうなものでしょうか、どんなふうなものであってほしいですかっていう問いに移りたいと思います。さてこれもどなたかに最初に喋っていただかないといけないんですけれども、●●さんは確か5時になったらお出になられるんでしたよね。じゃ、はい、発話してみてください。

K話者 2:55:21（16:23:47）

はい。私は対話しか考えてなくて。いま答えると、やっぱ対話の場っていうのは今見える範囲内だけではなくて、空間とか時間を置いてすごく広がっているそういう目線でやる。なのかなという風に思いました。はい。

司会吉田 24:22（2:55:41）（16:24:07）

対話の場はその場ではなくて、空間的にも時間的にも広がっている目線でやる。いいですね。ではこれに繋げて、どなたか、はいどうぞ

L話者

　さっきの東田さんのお話聞いてて思ったことなんですけど、現実的な状況の中で立ち上げなくちゃいけないっていう制約が対話のメンバーにもあるのかな。理想的に、みんなが誠実に語ってきれるとか嘘つかなければとか、みんなが話す能力を持ってるっていうことを想定したくなっちゃうんだけど、そうじゃなくても喧嘩があるみたいなことを想定してそこに立ち上げなくちゃいけないのかな、はい、そう思いました。

司会吉田　2:56:27（16:24:43）

　ありがとうございます。理想的な場があって理想的な人がいて、理想的な言葉で交わし合うわけじゃない。もっと足元からってことですね。ありがとうございます。では次これに繋げていく人はどなたかいませんか。こっちはいどうぞ

M話者 2:56:52（16:25:08）

　皆さんとは逆なのかもしれませんけども、阿吽の呼吸が通じない通じさせない場とは、逆に私は言葉の定義を明確に確認しながらコミュニケーションする場、ってしました。

（司会吉田　これは明確に定義してみて、その中で話してみるっていうふうな場が一つあるっていうことですね）

　例えば何か民主主義って言っても、多数決だと思ってる人と、1人1人の意見がちゃんと大事にされるっていう風に思ってる人とは違うのに、民主主義っていう言葉で語ってることが結構多かったりするので、そこは対話をするときに気をつけないとなって思っています。

司会吉田（2:57:37）（16:25:53）

　はい。民主主義という場の問題が出てきました。さて、これは誰に繋がっていくでしょうか？

N話者

　現実的な争点立ち上げなくてはいけない、です。

司会吉田 2:58:12（16:26:28）

　次に繋がりそうですね。先ほどNさんが言ったのは、まさにその現実、理想的でない現実にちゃんと足を向けなきゃいけないとおっしゃいましたよね。

（N話者　そういうことです。）

　はい。では、他繋げてみる方いらっしゃいませんか？シーンとなってしまいますね。シーンとなってしまったらどうしましょう。お名前がわかればいいんですけれども、●●さんのお隣にいらっしゃる方はいかがでしょうか？

O話者

　正解がない、なかったり、あるいは正解が一つではない。だからこそ、いろんな人が集まってお互い共有できる答えを探っていくような場所が、対話の場ではないかと思います。

司会吉田　2:59:34（16:27:50）

　ありがとうございます。正解のない中で探っていくんですね。何か、何かしらのもの行きつきました。正解のない中で、私達は何をどうするのか。それでは、これに繋げるにはどうしたらい

いんでしょうかね。ご指定しても構いませんか？まずいですか？●●さん。いいですか。●●さんお願いいたします。

P話者

　私は、対話はやっぱりお互いの意見と例え違っても聞く話すで、でゴールががなくてもいいって思っていたので、そういう何か反対自分の思ってることと反対のことも聞ける、話せる場っていうようなイメージです。はい。

司会吉田 3:00:43（16:28:59）

　自分とは違う意見も聞けるようなそういう場であると。ありがとうございます。さて、これに繋げてみるみたいと思う方いらっしゃいませんか？　後ろの方、いかがですか。

Q話者

　対話の場とは、合意できないことが多いですが、合意を差し当たり目指した方が良い。

司会吉田 3:01:30（16:29:46）

　さて、なかなか対話対話って言っても、これ以上重ねると、今度はすごい深い議論になっていきそうなぐらいになってきていて、そうすると時間も足りないという言いわけがましいことですが、対話の場とはについて打ち止めにしたいと思います。●●さんのお隣にいらっしゃる方はいかがですか。

R話者

　はい、ありがとうございます。自分が紙に書いたのは、新しい解釈が生まれる場というところという風に書いたんですけど、皆さんのお話を聞いて思ったのは、対話を触発するハブになるところなんじゃないかなという風に思いました。

司会吉田 3:02:32（16:30:48）

　なるほど。はい。触発するハブですね。

（R話者　作らなければならないんだな、っていう風に思います）

　なるほど、なるほどこれは閉めるに当たって良い言葉でした。ありがとうございます。さてそれではまた深呼吸してください。何か飲み物不足してる人はあそこからとってもらって、口に含んでもいいですよ。言葉を重ねるってなかなか難しいんですけれども、ここんところからが、一番の難問です。

🔶 三項目目

ファシリテーター、ファシリテーションについてです。どっちからいきましょう。ファシリテーションとは何だろうというのを最初にやって、その次にファシリテーターって何だろうか、に行きたいと思います。これも本当言うともうちょっと練った問題設定にしたらいいのかもしれないけれども、でも勢いでいきましょう。

司会吉田 3:03:43（16:31:59）

　はい。誰に行こうか。●●さんと元気よく目と目が合っちゃったから、お願いします。ファシリテーションとは。

S話者

　ファシリテーションとは、私がお伝えしたのは、真に公平であり、中立であるための技術。（対話の場での）真に公平、公平であり、中立である技術。

司会吉田　3:04:20（16:32:36）

　はい。ファシリテーションって技術ですね確かにね。さあ、これを誰がどう受け止めていくかすごく面白い。

T話者 3:04:59（16:33:15）

　私ちょっと

（司会吉田　話して、話してください）

　私もこの問いの設定自体はとは何かっていう風に定義をつけるというよりは、どういうふうなファシリテーションを作っていきたいかっていう、私の何ていうか未来志向的な意思の問題としての、ファシリテーションとは、何なにしたいかっていう、それでいきます。

　私は対話っていうこと自体が、そのその関係者っていうか、この場合は誰が関係者なのかっていうことも問いとしてはあるんですけれども、関係者の意見を踏まえ、率直な意見を踏まえて、みんなが望む未来をともに探って作っていくためのコミュニケーションであってほしいという風に対話について思うので、みんなが望む未来をつくるためには、みんなの本音が聞けないと駄目だということで、みんなの本年が分かち合われるようにするための技術。

司会吉田 3:05:41（16:33:57）

　みんなの本音が分かち合いできるようにするための技術。はい。良いわね、これをさらに繋げていってください。この列の一番後ろに座られている。はい。

U話者

北海道新聞の●●と申します。今日ちょっと取材を兼ねてお伺いしていますが、ちょっと記事を推敲しているところで、もう一度、、

(司会 ファシリテーションってあなたにとってどんなふうなものであったらいいでしょうか？)

U話者 3:06:42（16:34:58）

　私ちょっと先日宮崎さんとちょっと取材させていただいたんですがちょっとファシリテーターっていう言葉はそもそもあんまり聞く機会がなくて、今回核ゴミの取材をして初めて聞いた言葉で、不勉強なのかもしれないんですけど、ちょっとあんまり知られた言葉じゃないのかなと思うんですが、そういった前提でですね、やはり対話ってのはすごい、今回の取材を通じて、難しいものなんだなあと思って。だけど対話を盛り上げるだけでは駄目だということで、どうやって引き出すのかっていう、お互いの意見を引き出した上で生み出していくのか。賛成派反対派が思いつかなかったことが対話を通じて、、引き出すことができる、、そういった役割がファシリテーターあると今知り得た。

司会吉田　3:07:49（16:36:05）

　引き出せる役割っておっしゃいましたね。ありがとうございます。ごめんなさい推敲しされてください。はい次どうしましょうか。あ、はい。

V話者

今のを繋げるとですね、参加者が心理的な安全を確保されたら、安心してこんなこと言ったらちょっと友達なくすとか、そういう心配をしなくしない状態でちゃんと話せたとしてちゃんと聞いてもらえたっていう風に参加者1人1人に思ってもらえるような会話の舵取り。あえて対話ではなく会話というおしゃべり。

司会吉田　3:08:44（16:37:00）

この場で対話って言葉使ってますが、町民の会の皆さんくっちゃべるとかね。それとかお喋りとかね、私はお喋りってことが好きなんですけれども。なるほど舵取りね、ありがとうございます。心理的な安定感安心感をもたらす、そういう

V話者　（3:08:57）（16:37:13）

そういうふにしてちゃんと話せた、ちゃんと聞いてもらえたという満足感を与えてくれるようなそういう会話をね。

司会吉田

そういうファシリテーション技術ですね。でもそれをファシリテーション技術って言っていいのかどうか。技術って言葉はどうしても堅苦しいことになってしまいます。

V話者

心配りね

司会吉田　3:09:17（16:37:33）

心配りね。心配りという言葉が出てきましたね。これはですね、ありがとうございます。これに繋げてどなたか始めましょうか。お願いします。

W話者

全然まとまってないですけど、対話の場を作ることをする人がいることで、1人1人の人がすることではあるけれど、心配りっておっしゃったところに繋げて、2項対立になるところを超えた道を作り出していくために、そのそういうことが必要なってくるっていうところ。

例えばドという音が鳴ったりとかしてたら、それはドって音を出すための場じゃなくて、ドの音があるかはわからないけど、この音を本当に自分のところから出してみようって思うんで、そういう冒険していいっていう安全な気持ちだったりとか、そういうものを生み出せるような、それでそれは全体をお互い聞きあって、そういう言葉を出していけるようなことを促せる人そういう感じですかね。

司会吉田 3:10:30（16:38:56）

聞き合えるってすごく大事だと思って。聞き合える、それを促す人だよね。ありがとうございます。はい。●●さんどうぞ

X話者

ファシールfacileってフランス語で優しいってことなんだよね。easyっていうことですから。

やっぱりそのWさんのさっきのあれじゃないけども、やっぱり誰でも自然に話ができる、自分の気持ちが話せるっていう、さっきから対等ってことも問題なんですけど、やっぱ子供と話すと

きにどうしても大人と子供は対等じゃなくなっちゃうわけですよね。それだけ、相当本当に本音を聞こうっていう話なるとやっぱり信頼性っていうのがまずありますよね。さっきの平川さんの心理的なバリアを取り除くってこともあるし、やっぱり信頼性っていう、この人本当に信頼できるのか、何でも話せる。だからまずさっきの対話っていうのはまず対等であるっていう、その関係が本来対等じゃないんだけど維持できてる。だってプラトンの対話編なんてそうでしょ。ソクラテスとプラトンfで絶対師弟関係だから対等じゃないんだけど、でもその対等な場を作ってるわけですよね。だから本当は対等じゃないんだけどきちんと対等を担保して、それがやっぱそれが信頼性だとそういうことじゃないかなと思って。

司会吉田 3:12:02（16:40:28）

ありがとうございます。そのような場においてこそ成り立ちますね。ありがとうございます。はい。これに繋げて、さらに繋げてください。私はね、寿都の方もそうですけど、暮らしの中でみんな悩み、声にし、話してくれますよね。そうするのは大事だと思うんですよね。それと私そのすごく札幌消費者協会の食と健康を考える会のことに今日も言いましたけれども、やっぱりこの人たちも自分たちの暮らしの中から、そこに根ざす声というのをやってるんですよね。そういうことから考えるならば、今日もうひと方、男性の方が見られているんですけれども、ご発言いただけませんでしょうか？はい、お願いします。

Y話者

食と健康の範囲に入ってますけれどもファシリテーションのファシリテーターっていうのはあってもなかなか内容はわからないわかりませんでしたのでGoogleで調べました。その調べた範囲の内容でしか自分の知識はありません。ですからここで特別自分としてファシリテーションやファシリテーターとは何かということに応えるような内容、個人としての内容はありません。

司会吉田

何かっていうのはそれはよくないってやり方ってことを先ほどから言われてましてね、そうだなと思いまして、今まで聞いた中でファシリテーションとか、そういったものに対して何かが漠然とこんなもんだったらいいなと思うことありますか。

Y話者 3:14:09（16:42:35）

そうですねフランス語でも優しいということだって言われた言われた方の内容もとても良い響きと感じました。

（司会吉田　ありがとうございます）

それとですね、さっき、さっき聞いてみようと思っていましたが忘れてしまいましたけれども、ここに参加しませんかっていう誘いがありましたときにGoogleで対話を調べました。自分としてはその個人の背景によらず、対等に何か意見を出せるような場で、そういう部分の対話っていうのはやっぱりいいなと思ってここに参加して、地層処分の対話の話で振り返っていろいろ聞いてまして、これはそもそも対話が成り立っていないっていうか、対話の場でないものを対話場で言ってるんじゃないのっていう感じがすごくすごく残りました。

司会吉田

ありがとうございます。

さて、これを結びとして、ファシリテーションについて思うことをまず切り上げます。

🔶四項目目

司会吉田 3:16:10（16:44:38）

次の四つ目ってもいいですか。時間的に大丈夫ですか。はい。最後にファシリテーター。皆さん方、いろんな形で、今日のきたのわさんもそうだし、いろんな形でファシリテーターされてる方がいます。私が思うファシリテーター、あるいはこんな風になりたいファシリテーターをいろいろあると思います。そんな感じでこの言葉を交わしたいなと思います。

それで、どちらかというと、今日まだ発言されていない方に無理くり当てたいという願望を持っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。はいということで先に言ってしまうと思う。はい。●●さんの隣の方、

Z話者

ファシリテーターって一言で言うと難しいとしか、私には頭の中にはないんですね。ただ、素敵なファシリテーターの方に会ったときに思うのは、その場に、対話の場で自分が馴染めるようになってくる、つまり、潤滑油的な交通整理っていうのは堅苦しいんですけれども、そういう潤滑油的な役割で対話の場の中に安全を作ってくれる人がファシリテーターなのかなって、今日参加させていただいて、思いました。

司会吉田 （3:17:40）（16:46:08）

ありがとうございます。お久しぶりです。潤滑油、はい、潤滑油って出ました。はいこれを受けて、どなたか。はい、どうぞ。

α話者

はい。まず笑顔が素敵で安心感のある人、見た目が。で、実際中立に平等に話を聞いてくれたり、話せなくても話したい雰囲気を出してる人とかいると思うんですけど、そういう人の話をうまくを引き出してくれるような方が何かファシリテーターっていうイメージです。

さっきのファシリテーションなんですけど、ファシリテーションって言葉自体がすごい柔らかい感じがしてミーティングとか会議って何かもう対等じゃない感じがするんですよね、イメージ的に。なので、そういうなんか笑顔の素敵なファシリテーターの人がいて、何かいろんな問題を輪になって、何か話せるような場が何かをファシリテーションだったり、何かそういうイメージの人がファシリテーターだったらいいなって、何となく思いました。

司会吉田 3:19:35（16:448:03）

はい●●さんが望む、願うファシリテーターの方のイメージですね。ありがとうございます。輪を作る、輪ができていくっていうことですね。はい良い言葉すね。ありがとうございます。さて、はい、お願いします。

β話者

えーと。何か話さないと帰れないそう（司会吉田　そう）

私いろんな地域、●●さんの知り合いなんですけれども、ファシリテーターで思うのですはね、一つは、大抵第三者で外から来て地域の問題でファシリテーターを務める場合が多い。ですからまず条件の一つとして、その地域のことをね、勉強してもらいたい、来てほしいということ。それから、そういうことを条件にして、賛成反対いろんな意見が出てくると思うんですけどね、どちらにもね地域の状況のを踏まえて、どちらにもね寄り添うっていうことが大事なんじゃないかと思うんですね。

そうすればね、少しは地域のことを喋ってくれれば安心するんですよね地域の人もね。あ、こんなこと知ってくれてるんだなと。賛成や反対に関わらず、そういうことを条件にして平等にあるということは当然ですけど、そういう地域に寄り添うと同時にみんなにね安心感を与えるような、そういうファシリテーターであったらいいのかなという風に思う

司会吉田 3:21:31（16:49:59）

ありがとうございます。地域に外部から入ってきた人がファシリテーションする。そういう形が多分多いとするならば、やはり内側にいる人にとっては、その外部の人に対してまず不審しか、まずありませんのでそれをどう乗り越えるかですよね。うん。

私事ですが、ついこの前、とある県に行って、とあるファシリテーターをしたんですけれども、そのとき、参加者の人からお前たち外から来たもんだろうって言われましたね。はい外から来ました。でも、って形で、やはりその人と話して、やっぱり話し込んでいくうちに、この通り私しつこいですよね、みんなに話させようとか色々してますでしょ。そんなことがやっぱり言葉のやり取りあった。その中で、やっとちょっと信頼してくれたのか最終的には言葉を語ってくれたんですけれども。

でも思いました。ファシリテーションをしに地域に行くってことは、外から来て迷惑かけますことにもなってしまう。これはやっぱり気をつけなくちゃいけないなと思いました。ごめんなさいって自己語りをしてしまいました。はい今の続けていって、どうでしょうか？

まだ話してないよって人が是非手を挙げてください。●●さんの前の方、話されてないですよね。すいませんお願いします。

γ話者 3:23:06（16:51:34）

ファシリテーターは、先ほど中立とかそういう話は出てたんですが、なんか中立、人間なので100%中立でもいいかなと思ったので、あえて開き直ってでも相手を尊重していろんな意見を引き出すみたいなのがファシリテーターの大切な役割のかなって考えてました。

司会吉田 3:23:29（16:51:57）

ありがとうございます相手を尊重する。その場にいる人を尊重するってことですね。はい、ありがとうございます。続けておられる方お願いします。

δ話者

はい。ちょっと左の人も一味なのでちょっと似た感じになっちゃうんですけど。

まずやっぱりその対話の場を設けないといけないときって、あんまり理想的ではないけど、何がしかの合意形成とか何かしか回答を出さないといけないことが多くて、そういう場合って、ファシリは自分自身が自分自身の意見として中立っていうのは多分土台になんですけど、それを

重々承知の上で、自分の思いはいろいろあれど、まず聞こうっていうカウンセラー的な姿勢とか、思ってその意見の軽重をフラットにする人かなって

司会吉田 3:24:27（16:52:55）
　嬉しい。私もそう。ここで私が中立でなくなったね。はいやっぱり思います。はい。言葉にケチをつけちゃいけないんですよね。はい。ありがとうございます。さて、あと、、誰か
ε話者
　皆さんのお話を聞いていて、いろいろ難しい中でファシリテーターとして携わってくださる方には希望になってもらいたい。いろんなことがいろんな雰囲気になったりすると思うんですけどその中でも希望をみんなで見られるような雰囲気にしてもらえたらいいかなって思って。

司会吉田 3:25:21（16:53:49）
　ありがとうございます希望ということがありました。絶望の底にあるかもしれない希望ですね、良いわね。。。はい、お願いします。
ζ話者 （3:25:34） （）
　私は、自分に課しているファシリテーターとはっていうことなんですけど、話ささせるっていうか、参加してる人が話したくなる、（司会吉田　話ささす、はい）
　ええ、場づくりに手間隙かける人という風に風に思っていて、それは今日は多分皆さんご意見がある方だから「さす」っていうことで本音が聞けるっていうことがあったと思うんですけど、そういうことばっかりじゃないというか、話ささしたときに自分のタイミングじゃないよって言って本音じゃないことが出てくるみたいなこともあるっていう人も場もあるなっていう風に思うので私達1人1人がそんな弱い存在じゃないというか、支えないと話せない人間じゃないという風に思っているので、話ささる場さえあればみんな話したいことを話し出すという前提で、話されるのになるように手間暇かける人って思っています。
（司会吉田 ありがとうございます）
ζ話者 3:26:49（16:55:17）
　あともう一つは、自分の権力に自覚的である人ということは自分に課しています。その先ほどもあったように意見・誰かから出された意見について可視化したりだとか、いろんなファシリテーションの実践があると思うんですけど、これで合ってるみたいなことを確認しながら、なんていうか、勝手に進め、ファシリテーターという存在はその場を丸ごと仕切る人みたいに見られて勝手に進めちゃうこともできるっていう風に思うので、その権力に自覚的である、はい、みたいなこと

司会吉田　3:27:36（16:56:04）
　ありがとうございました。今日の締めくくりみたいな形になりました。
　それでですね、今ここで●●さんがおっしゃったように、権力的なものに対して自覚的である自分であっても力を持つ場を作るってことは、力を持つということになりますよね、そこに自覚的であれっていうことにも繋がると思います。

ちょっと宣伝になりますけれども受付のところに緑色の冊子があったと思いますけれども、あれはあのお帰りになるときに遠慮なく持っててください。これにプロジェクトをしていた時の成果物なので皆さん方にお持ち帰りいただきたいと思います。さて、言葉を重ねるっていうことを私は初めてやってみました。言葉をもらってきてそれを繋げる、繋げるって面白いなと思ったので、これからもやってみたいと思います。そして私も問いの立て方を工夫します。そのときにはまたよろしくお願いいたします。

では、とりあえず語り合いは終わりましたので、この後、平川先生から何かコメントをお願いします。

平川秀幸先生コメント 3:29:03（16:57:31）

はい。僭越ながら。簡単な話というか短い話なんですけども。今日特に第3部の皆さんからのいろんな言葉を見てて思ったのはですね、その８割くらいがそうだったのですがね、対話って言った時に、目的などの、目的のないものがあるんだろうなあと、それはさらにそれは先ほどちょっと使ったんですけど、会話。対話と会話、対話ってのはダイアローグ。これどっちかっていうと、二者間の関係なんですよね。会話っていうのはもっと二者以上の複数の人たちとの間のおしゃべりみたいなもので、対話って言ったときにもやはり、大元はギリシャのダイアログで、プラトン・アリストテレスとか、ソクラテスのダイアローグっていうのは、何か一つのものに向けて対話してくるという目的があるのに対して、会話とかすると、特定の目的はなくって、さっきも生きることとしての対話という言葉もあったんですけども、対話すると思っている何か特定の目的を持ってるわけじゃなくて、あえて言ってしまえば、人と一緒に繋がっていくための友達でいたり親子でいたり、なんか繋がっていく、まさにそういう意味では生きることとしての会話であると思います。そういう日常の中での家族とか友達であるとか、何かそういう日常のいろんな場所、場所での会話というのがベースになって、目的のある対話っていうのも成り立ってくるのかなという風に思ったんですね。（3:30:44）

だから、何か対立とか分断が起きてしまっても、なんかどっかで例えば幼なじみ同士であったりとか、兄弟であったり、もちろんそういう昔から仲良かったのに突然何かのことで縁が切れてしまうことは人生いっぱいあるんですけども、でも逆になんか元からそういう会話ずっと会話で繋いできた人の会話、さらにいろんなことを一緒に経験する中で繋がってきた人の繋がりというのが、特に生々しい問題を扱うときには再度縁よすがになるのかなという感じがちょっとしたんですね。さらに今日はこれ第3部の最初の方であった対話とかそのあたりで出てきた話だと思うんですけども。あ、これ二つ目のところですね対話の場とはということで、空間的にも時間的にも広がっていると川本先生おっしゃったんですけども、これはまさに今そのインフォーマルな場とフォーマルな対話の場、そういうもの、例えば今日はどっちかというフォーマルですし、いろんな対話を対話って名前がついた場所がフォーマルなところだったと言えるんですけども、それと、日常的に何気なく交わしてるような会話であったりとかあるいは、皆でワイワイおしゃべりをしてるような話も含めて、それが全部実は繋がってるんだと。何か特別にフォーマルな対話の場だけが特別な場ではなくて、あそこであいつと話したことをあっちで、あの人から聞いた話というのを自分の中で受けながら紹介しながらまたそのフォーマットが出てくる。というのもあったりするので、やっぱそこにそういう意味で、まさに全ての会話はちゃんと繋がりあっていて、それぞ

れの経験として繋がり合っていて、そういうものを引き出せる場というのが、フォーマルに作られた対話の場なんだろうなって。最後の話に繋げると、ファシリテーターが大きな役割であるとか、いう風にちょっと感じました。（3:32:50）

そういう意味でそういう日ごろからの会話というのはまさに大事なことで、これはどなたか皆さん、まさにそうお考えだと思うんですけども、その上であえて今度はフォーマルな対話、会話じゃなくて対話の方に話を戻すと、そちらの方でやはり何らかのルールというものをちゃんと共有していく必要がある。法律みたいなものが作れなくてもちゃんと、例えばその国の行政とか行政も含めて、あるいはいろんな事業者も含めて共有できるような対話のルールブックみたいなもの、何か対話をするならこういう作法を守らなきゃいけないよねっていうのをちゃんと専門家同士、特にそういう私もそうですし、川本先生もそうですけれどもそういう専門家として集まって、1回なんか1回で済まないと思いますけども、何かそういう面でルールを作る。特にこれはこれまで特にこういう科学コミュニケーション、科学や技術がかかるコミュニケーション、リスクコミュニケーションとかっていうのは、特にこの20年ぐらい、いろんなところにいる方たちが経験積んできているので、それを踏まえてちゃんと言葉にして、ある種のルールにしていくっていうのは、もう特に我々専門家の役割としてはとても重要だなという風に改めて思いました。はい、以上で終わらせていただきます。

司会吉田　3:34:14（17:02:42）

ありがとうございました。専門家が道をつけていく、あるいは何らかの形で形を作っていく。これは期待したいと思います。と同時に、（平川　道をつけていくよりは後から道を舗装して、、）

そうそう、そこに繋げたかったの、実は。つまりね、私達、寿都の町民の方、札幌市民である私達、そういう方たちが色々ごちゃごちゃ動いていて、何らかのアクションがあったりする。そういったものを専門家はみて、そしてそれを整理されていくっていう風にも捉えてもいいですか。

平川秀幸

そうですね学者の基本的な役割はミネルバのフクロウですということですから。

司会吉田 3:35:00（17:03:28）

うっふっふ。私達1人1人も参画しているってことですよね。ありがとうございます。今日はとても長い時間、皆さんこの場にお付き合いいただきありがとうございました。

実はこの（スクリーンに郡さんが入力した発話者の言葉のエッセンスが投影され、流れていく）皆さん何気なく見ているもの、瞬時に言葉が文字になって出てくる。これは、はいちょっと（紹介する）、郡さんがやってくださいました。郡さんは私の大学の後輩にあたるんですけれども、CoSTEPの修了生でもあります（拍手）。今、あちらで黙々と何かされている方がいます。これは今度は、今こちらが時系列で対話のエッセンスを皆様方にお見せしたんだとするならば、あちらは話されたことの構造化をしています。

それを視覚化している最中です。この後皆さん方、そちらの方に行って見に行ってください。立ち上がって見に行ってください。明田川さん（呼びかけ）、見に行った人には説明してあげてください。はい皆様方、五、六分そういう時間を作りたいと思います。こちらの方（郡さん）にちょっと違うところを見せてって言ってもいいし、あちら（明田川さん）に行ってもいいです。5分間だけそういう時間にします。その後で閉会セレモニーに入りたいと思います。では見にいってください。

明田川 3:36:54 （17:05:22）

バラバラにして構造化しなかったんですよ。なんか本当に連想ゲームみたいになってたから、ちょっとそれを崩さずに、赤を引いてるのは私の主観で聞いちゃってるんですけど、なんかすごく面白くて、初めの方が何か理解意識すり合わせとか、あとそこに関わる変えるわかるとかいう単語がこちら繋がってきて、次に対話をどうあってほしいみたいな、二つ目のときは思心さんの方から時空を超える場じゃないか、そしたら現実的なもので現実に根ざした方がいいっていう実はそれっぽい話があります。民主主義の定義も人によっていろいろだよねって民主主義っていう場面が出てきて、現実は対立とか正解がないんで違ってもいい。でも違ってるけどさしあたりの何かをね、見出すんじゃないかとか、そこから新しい解釈が生まれる場作りを触発するハブを作らないとみたいな話になって。ここら辺もすごく面白かったんですよね。こういう場がいいんじゃないかって話から、最終的にハブを作ろうみたいなところで繋がって面白いと思ってました。

こちらのファシリテーターって何だろうところは、公正中立で本音っていうワードが出てきて、だんだん引き出すってファシリテーターの何か役割に言及してきて、心理的安全性っていうのは平川さんがおっしゃってくださって、そこからさらに一歩進んだのか、なんか冒険したりチャレンジできるドの音を出してみようみたいな、すごく素敵な例えだなと私は思ったんですけど。そこから小野さんが誰でも気持ちを出して話せる、誰でもってって子供の例出されたと思うんですけど、本当子供と大人が本当は対等じゃないけどでも対等な作りを担保するっておっしゃっていて、それがファシリテーターじゃないか、そのために信頼性が大事だっておっしゃってて、なるほどって、すごい私思ってました。

4回目の対話のとき、私にとってのファシリテーターこんなファシリテーターになりたいのってお話のとき、一番最初の口火切ってくださった方が潤滑油じゃないかっておっしゃってくださって、そこから輪になって話せる場、で、地元のすいません地域の方でしょうか、外から来る第三者の方がファシリテーターやることが多いような気がすると、そのとき地域に寄り添っていただければってそれが条件になると安心できるっておっしゃってくださって、本当、はあって、私もそこと思いました。その後吉田さんが司会されてたんだけど、ご自分のことをちょっと話されて、自分も気をつけないとっておっしゃったんですよね。うんうんって思いながら聞いてました。次を話してくださった方が100%中立ってね、もしかしたら難しいかも。でも相手を尊重することが大切じゃないかって話してくださって。深いと思ってました。

で、ファシリテーターが実際に何かこのファシリテーションをするときって何か回答出さなきゃいけないとか、何か合意形成しなきゃいけない場面がやっぱありますよねっていうあの発言があって、本当そうだなと思って、だからこそ意見の傾聴をするカウンセラーのようにっていう風

に言ってくださって、本当そうだなと思いました。次の方が希望であってほしいと。希望っていい言葉だなと思って。だんだんラストに繋がっていくんですけど宮崎さんの方から話ささるっていう北海道弁で、1人1人弱い存在じゃなくて、自分から話すことができるだからこそエンパワーメントなんだろうとこれは意訳ですけど、あの話ささる場作りをしたいって、そのためにも自分の権力に自覚的であることがあってこれは本当に吉田さんがおっしゃってた気を付けるともう本当にこうすることだなと思って私はなんかすごく感動しながら聞いてました。はい、そんな感じでありがとうございました。（拍手）

司会吉田 3:41:30（17:09:58）

はい、それでは。この後市民プロジェクトの代表の方と小野優吾先生から、感想乃至コメント、あるいは未来に向けての言葉をいただきたいと思います。そして皆さん、先ほど書いた紙、水色の紙ありますね。あの紙をこれに置いてくださいね（p56で紹介しています）。私も後で書き入れますのでよろしくお願いします。では、宮崎さん。

宮崎 3:42:04（17:10:32）

市民プロジェクトの宮崎です。本日は長丁場の時間でしたがご一緒くださって本当にありがとうございました。私はいくつかお話したいことあるんですけれども。一つ目はまずこの場で皆さんにお会いできたっていうことへの感謝です。報告書というか見解をあの文書として作成をしてそれをノートっていうアプリを通じて出しましたっていうことは私達のその公的な社会の中でのコミュニケーションとして出したってことはあるんですけれども、それをはい勝手に読んでくださいっていうふうな形だけじゃなくて今日みたいな場で一緒に声で伝えさせてもらう。そのことについて皆さんの声でもまたフィードバックをもらうっていうそういう出会える場を作っていただいたことやそれから来ていただいたことにとても感謝しています。

それから二つ目はこの対話の時間はいこの、このみんなの重なり意見の重なりを聞いた後にまた話すっていうなんていうか、交わりの時間っていうのがとっても大事だと私は思っていてもっと皆さんとお話したくなりました。この会の進め方自体は私自身も初め初めてというか普段のあの実践とはまた異なる場作りだなっていうことも感じていて、諸自分の率直な感想で言ったときに、もっともっとできるっていうか、もっと私達の可能性が結び付け合えるような場作りができるんじゃないかっていう風に率直に思っています。例えば自分だったらもっと重なり合い意見の重なり合いが大きく見えるように可視化をするなとか、それからファシリテーションというかあのみんなが勝手にいろんなことを話し始められるような仕掛けを、できるかなこれもできるかなみたいに感じたことがあって、もっと一緒にこの場作りってこと探求したいという気持ちがわいています。と同時にもしかしたらそれは私が普段やっている組織作りとかまち作りのに関するファシリテーションのあり方特有のことなのかもしれなくて、リスクコミュニケーションとか科学技術コミュニケーションっていうその領域ならではの配慮ということもたくさん隠されてたのではないか、という思いもあるのでそれも引き続き私も学んでみたいという気持ちです。

最後から2番目です。この皆さんのお話を聞きながら私が感じたこととしては、こういう風に一緒にこの対話の場って、ここがちょっとおかしいんじゃないとか、もっと変えていきたいよねっていう思いを持ってくだ持っておられる方がこんなにいらっしゃるんだっていうことになんてい

うか嬉しくなりました。よかったらぜひそれでお話を聞くとあの方とも、さっきのこれって他の方とも喋りたい、あの活動も喋りたい方とも喋りたいっていう風に思って、今後その対話の場とか、核のごみに関するプロセスをもっと私達が求めるようにしていくために、繋がりたいという気持ちでいます。よかったらメールアドレスを書いた名刺を持ってきたのでぜひちょっと名刺交換させていただいたりして、またこちらからのこんな場でまた話そうっていうような呼びかけだとかあのメールでご案内させていただきたいなと思っています。

最後にちょっと受付のところにカンパのお願いっていうことであのボックスを買っていただきましたご協力いただける限りでもちろん結構ですのでちょっとこの資料の印刷代であるとか調査にかかる経費だとかそういうものの金銭的な支援が今足りていないので、もしお時間いただける方はぜひカンパの方のご協力をお願いできればと。どうもありがとうございました。引き続きよろしくお願いします。

司会吉田　3:46:53（17:15:21）

ありがとうございました。皆さん方のネクストに繋がったのであるならばとてもよかったなと思います。それでは小野先生にマイクをお渡してください。

小野有五先生 3:47:09（17:15:37）

何か5分間喋るということで呼ばれたんですけれども、今日の会は最初からあんまりよくわかんなかったんですよね。それで、タイトル見ても対話とは何かを考えてみようかいみたいなことでどういう風になるのかなと思ってきたので、来たんですけども最初吉田さんの説明があんまりよくわかんなかったんですが、はっきり申し上げまして、いきなりこの趣旨説明というのだと読まれて、これはいわゆるファシリテーションとしては最悪ではなかったかなと思っているんですけども、やっぱりみんながね、まずここに来た人がどういう人が来てるのかそれさほど大勢じゃないわけですよね。だったらもう1人1人ね。ある程度それがわかるような形にして、もっと和やかに最初からできたらよかったんじゃないかなと思うんですけれども。

それで一番の目的は私なりに考えたら、今日の核ゴミに関する何か今日あれですよね核ゴミに関する対話を考える市民プロジェクトの報告を、とにかくすごく調査してくださって、それを聞くのがメインじゃないかなと思ったんですよね。ですからそしてプロジェクトの方もそんなたくさん何十人もいるわけじゃなくて、5人でやってらっしゃるんですか。なんかそんな感じでしたよね。そしたらもうその5人の方をまず紹介していただいて、この5人でやりましたっていうので、私達がもっとその5人と親しくなって、そっからいろんな話ができたらよかったんじゃないかなと思いました。何となく最後にはわかってきたっていう感じがするんですけども。

元々対話ということで今日はずいぶんあの議論になりましたけれども、この今日の資料でも17ページ目にありますけれどもこれはもう、向こうが国が勝手に設定してきたわけですから、対話の場というねそもそもそれはゴミの処理の選定が円滑に行われるようにこれを設けるんだという完全に向こうの土俵で作られたものなわけですよね。

だからそれをやっぱり我々がぶち壊さないといつも向こうの土俵の上でやることになってしまって。だから町民の会でくっちゃべる会っていうのを作ったのは、先ほど平川さんが言われたように、くっちゃべる会ってのは何でも自由に喋れる会なわけです。対話の会っていうともう最

初から目標が設定されていて、もうこのことだけしか喋れませんみたいなことになっていて、完全に向こうの思い通りに動かされてしまってるわけですよね。だからそこをまず私達は壊したいと思って何年かやってきたわけですけれども、先ほど町民の会の東田さんが話されたように、結局私達は何とかして最初っから国やNUMOがやってきてることが最初から間違ってるわけですよね。町長も間違っているわけで、それを何とか正そうとしてこの丸4年間5年間やってきたんだけどもやっぱり力及ばずでうまくいってないわけです。

それで私は専門家の立場で17ページにある専門家等からのいろんな意見や情報提供を確保するってちゃんと法律でも言っているにも関わらず、活断層だとか地震だとかですね、そういう専門的な地層処分には絶対あってはならないものについての、批判的な意見を全く町民に伝える場をまさに設けてないわけです。完全に法律違反なわけですよね。それを言い続けているんだけども、結局未だにそれがスルーされてしまっているわけです。

やっぱりそうすっともう一つは向こうが言ってる対話の場っていうのが全然対話の場になってないでしょ、本来の対話の場じゃないでしょっていうことを、やはり言ってくださる人たちがたくさんいてほしいわけですね。そういう意味で今回のこの市民プロジェクトっていうのは今までになかった人たちなわけですね。ですから、そういう人たちから、国に対して日本に対して強くおかしいでしょっていうことを言っていただく。そしてその吉田さんたちのいわゆる研究者という人たちが学問的にも明らかにおかしいでしょっていうことをどんどん言っていただくというですね。そういうプロセスがこれから必要だと思うこれからっていうか、さらに必要だと思うのでそういう意味で今日の会は良かったんじゃないかなと思いますので、ぜひこれからも町民の会の方たちとも一緒にですね、本当の対話の会というのを対話の場というのを実現できるように、私達の言葉では戦っていただきたいと思うんですね。ただ今日の趣旨はやっぱりそういう風に反対しないとか戦わないっていうね、そういう前提でこの回はやってるそれはそれでいいと思うんです。いいと思うんだけれども、私達としては戦わなければ変わらないんですよ何もやっぱりそこはわかって欲しいですね。

ですからこれは私もずっと研究者と運動者っていうのは25年間二足のわらじを履いてやってきましたけれども、研究者視点としての立場それは論文を書けばいいんです。今日の見解っていうのも本当にこれそのまま論文になるような内容だと思う。それはやっぱり研究者の方が手助けして早く学術雑誌でも何でも書いてそういうもので学問的にもおかしいでしょっていうのを日本だけじゃなくて世界に知らせる。そういうことはすごく大事だと思うんですね。それと同時にやっぱり地元で本当に酷い目にあっている人たちとどういう風に手を結んで寄り添っていくかというのを、ぜひ考えて一緒にやっていただきたいと思います。どうも今日はありがとうございました。

司会吉田 3:53:27（17:21:55）

先生ありがとうございました。委員の私もね思ったんですよね趣旨説明は書かざるを得なかったんです。なぜかというと、この対話はこの場というものがもし市民プロジェクトさんだけの個別のものであったならば、それはまたそれで大学の中でそういう運動をやるのかっていうふうな、範疇に収まらず外からですね、言われかねない。そういう風になると、今度市民プロジェクトさんたちの方の活動にも制約がかかる。そうならないようにするためのこの入れ子構造だったんです。ですから、分かりづらかったのは何でこんな入れ子構造してたんだろうかっていうことで、そ

れはどうか皆さんかみしめてください。小野先生メッセージをちゃんと受け取りました。ありがとうございます。()

（3:54:15）

　はい。では、この会は1回こっきりの会では多分ないと思うんです。市民プロジェクトさんや町民の会の方たちも様々な形で自分たちが発信したことを、ちゃんとここで言ったところの信頼関係を持つような場で受け止めてもらって、さらに自分たちに生かしたいとおっしゃってましたよね。そういうことのためには、こういった場を繋げていけたらいいなと思っております。

　と同時に、先ほど平川先生も川本先生もおっしゃっていましたけれども、専門家がもうきちっとその後からなのかもしれませんけど道を整備していくってことをおっしゃってましたので、そういう2方向からあるいは3方向4方向からやっていきたいと思いますので、皆さん今後とも、もしこういうお誘いが来たなと思ったら嫌がらないで、どうか参加くださるようお願いいたします。

　今日は長い間、あっ大事なことを忘れていた。これ（考えよう会）は竹津さんが記録して、映像等録画をしてくれています。これによって私、この会の報告書、報告書という立派なものはできないかもしれませんけれども報告書を書きます。まとめます。それを皆様方のメールアドレスにメール添付で送るというふうな作業にこれから入りたいと思いますので、お待ちください。今日はどうもありがとうございました。(3:55:45)　**17:24:13**

以下省略

回収紙からの清書：思われたこと、他の人の言葉を書き留められたもの／１列１枚（ひとり）

対話とは・対話について	対話の場とは	ファシリテータF・ファシリテーションFt
がまん！！	新しい解釈が生まれる	ファシリテーターFは聴く人、待つ人
「現実的な状況」の中で立ち上げなくてはいけないもの		Fとは「人」じゃなくてもよいのでなくてもいい。 ファシリテーションFtとは「状況」の中で、なんとか異見をかわすためのサポート
人間ができる未来をつくるための責任ある行為のひとつ	あうんの呼吸が通じない言葉の定義を明確に確認しながらコミュニケーションする場	Ftとは、結果の対して独立不偏
自分の意見がひとりよがりにならないための他者とのすりあわせ	人と人がそれぞれの持っているものを共有してわかろうとする場	Ftとは、願望ですが、１対１で話せない人たちに寄り添ってほしいです
①対等でなければいけない。だまること・不参加が拒否とはならないようにする	②密室でも公開でも良い。集まる人が自由に話せなければと考えます。ただしきろくはかんけいする人たちに公開すべきでは（今回では道民）	①と②を基に、臨機応変に、結論を導くのではなく、潤滑油！、会話を引き出すこと
正解ではなく納得解をさぐること／立場の共有をするだけでもいい	誰にとっての納得解なのか、お互いに共有しあえる場／ただ「フーン、そうなんだ」でも良い。でも、とはいえ対話が必要な時って、正解出さないといけない時だよね	ファシリとは、中立ってのはどだいムリ。その上で多様な意見に目配りする人・コト、カウンセラー／出た意見の軽重をフラットにする人
生命の存在確認	個としていられる場	場の保全

対話とは・対話について	対話の場とは	ファシリテータF・ファシリテーションFt
ある話題に対する互いの意見を知る	互いの意見を共有する	異なる意見の発話を促す／公平にはなれないことのひらき直り。でも尊重して意見を引き出す

相手と自分を知る、整理する、優先順位をつける		（うーん）場をなんとかつくる、つくろうとする人
お互いの意見、たとえ違っていても、聞く・話す／合流しなくても良い		笑顔が素敵な人で安心感のある人／中立に話を聞いてくれる人／引き出してくれる
互いに変化させられる期待	十分な時間をかけて互いを理解し、意見を交わし、それを繰り返せる場	
当事者、関係者の意見をふまえて、皆がのぞむ未来を共に探り、作っていくためのコミュニケーション（であってほしい）	誰がいる場？ドイツのプロセス前提？	ファシリテーションとはこの大変な問題において、☆に向かって・みんなの声が出せるようにする役
話し合い／受けた言葉に対して能動的に考え応えるキャッチボール	立場や年齢関係なく話し合えるフラットな場	Ft：促進・触媒になるFがいながら、その前後で少しだけ変化があるもの／螺旋
相手の意見を理解すること	参加者全員がフラットな立場で話せる状態	意見を引き出し・みえる化する人
		Ft:話し合い（対話／狭く定義しないで良い）の内容を豊かにするために、環境（形式と雰囲気）を整えること／環境を決定する暴力にもなりうる。
お互いの立場を理解しなおしながら、やり取りを行う。		話し合いをより話し手により、深いより良いゴールにまとめる
	正解がない、あるいは正解はひとつではない。だからさまざまな人が集って、お互いに共有できる答えを探っていく必要がある。そういう話し合いをするのが対話の場	ファシリテーターは待つことができる人で、対話の場において、参加者の声を（多様な声）引き出す役目。強者の声だけに偏らないように。
対話とは：対等な関係のもとでの話し合い		
対話とは：聴くこと　知ること　話すこと		
対話とは違うことを前提にして、目的や意図を持たずに話しこと、聴くことで双方が変わること。 （対話は手法ではない、がまん／相手をかえられる期待感／対話の前と後では変化がある／「対話とは」と問わない方が良い？／話し合いで良い／分断を有無？／）		
対話とは：互いに変わりうるという希望の共有　あるいはユートピア、あるいは手段の一つ、あるいは手段ではない？　うーん！		
対話とは： ・ 参加する双方が「対等」出ないと難しい ・ 対等とは双方が変わりうるということ（相互作用的）「撃っていいのはいいのは撃たれる覚悟のある奴だけだ」 ・ 双方が対等になれる場＝アリーナを誰がどう作れるか？➡今後に向けて／今、目の前の問題について 対等なアリーナ＝双方がチャレンジャーになる場 ●目的達成のための対話　●目的のないつながり合うための会話etc（日常的な人と人とのつながり） ⬆️ ●生きることとしての対話（土台として）		

付録
主旨説明

文責　　吉田　省子

こんにちは。分野横断リスク問題研究会の吉田省子です。ご多忙にもかかわらず、多様な背景を持つ皆様にお集まりいただけましたこと、感謝いたします。

8月1日の第５回特定放射性廃棄物小委員会で「核のごみに関する対話を考える市民プロジェクト」の見解が参考資料にあげられていました。本日は市民プロジェクトさんの協力を得ての開催です。地層処分への反対や賛成のコールをするのではなく、何らかの合意形成を図ろうとするものでもありません。私達全員にとってのこの場のルールは、詰問し非難しあう場ではないと理解して互いに向き合おうということです。

目的は二つあり、一つは市民プロジェクトの報告に耳を傾けていただくことです。あたかも公の検証に喧嘩を売っているように見えるかもしれませんが、それは違います。相補的なのだと考えています。もう一つは、厄介で面倒臭い問題での対話の場が抱える課題を、意見の重ね合わせを通して互いを意識し合い、各人の今後の活動や考察に繋げてもらうことです。

私は明治以降の日本の天文学史研究をしていますが、実践を通してパブリック・コミュニケーションという領域に近づいています。20年前に札幌市郊外で遺伝子組換えイネが栽培され、開発側の住民説明会があり、その説明会を私は観察し、専門家と市民との対話は可能かと考え始めるようになり、対話の実践に踏み出しました。モノローグではないダイアローグ。対話という言葉の意味は、シンプルに見えましたが実に厄介で場面ごとに意味が違っているように感じられたので、対話という言葉の定義はせずに、あるいはできずに、暫定的に、関係者間の相互理解を深めるための、互いの情報共有と意見交換という意味で用いました。

北大農学部チームは、BSEやゲノム編集作物などの他、2011年夏には福島の桃を題材にして対話の場作りを試み、リスクコミュニケーションを職業ではなく職能として学ぶ大学院カリキュラム作りに関わりました。私は、培養肉農業者ダイアローグを試み、分子ロボットの農業利用における倫理的・法的・社会的課題を考える研究会にも参加しました。いずれも不確実性や複雑性、多義性あるいは無知という言葉で表現される問題群で、技術が社会に埋め込まれようとする際に社会的問題を引き起こす厄介な案件です。

厄介な案件では、進める側は情報提供を専門家に委ね、対話活動という名の理解促進活動を進めるかもしれません。反対の見解を持つ専門家も加わっているなら、豊かな対話の場面がひょっとして期待されるかもしれません。一方、懸念する側はその場に十分満足できなければ、反対運動を展開するかもしれません。

さて、全く別の案件での個人的体験ですが、反対運動をされる方の中には、反対する理由は正しいのだから広く知れ渡って理解してもらえれば、反対運動に賛成してもらえると思っていらっしゃる方もおられました。科学コミュニケーションに関わった方にとってはお馴染みの欠如モデルとそれへの批判を、私は思い出しました。正しい情報が伝われば多くの人々は支持してくれるという思い込みは、進める側の専門家だけではなく、反対する人にもあるのだなと思ったものです。

だがしかし、いや、まてまて、反対の見解を持っている人たちも欠如モデルにとらわれていると指摘して、一体何になるというのか。知るということは大切で何事においても相互理解の前提です。むしろいま問題なのは、対話を安易に利用して結局のところ受け入れてもらうことを目的とした理解促進活動のあり方なのではないか。そうすると、新しい対話の枠組みが必要になるのではないか、と思い至るわけです。

私はリスク問題を話し合う場を作ってきました。情報提供者はその分野の専門家にお願いしましたが、推進する側の未来像に即した理解を求めるという場にはせず、また、予め決めたゴールに向かうような進行や司会を目指しませんでした。とはいえ、市民や懸念する側からの情報提供を組み込んだ、そんな対話の場を私は今なお構築できておらず、どんなものかさえも見当がつきません。ただ、共生成Co-productionという性格を持っているのではないかと思っています。

会場においでの平川秀幸先生を通してこの言葉は知っていたのですが、2016年にある本（”Remaking Participation”）を読み、強く自覚しました。この認識の背景には、札幌消費者協会の食と健康を考える会とのおつきあいがあります。この方達は相互に情報発信者となり学習しあい、暮らしの中から科学と技術について考えておられ、広がらないという難問を抱えながらも20年の実績があります。

そのような中で市民プロジェクトさんから相談事が舞い込みました。この春のことです。「地層処分の反対運動を展開するような場ではなく、寿都町と神恵内村で実施された対話の場に関する自分達の見解を知ってもらい、自分達の見解に対する様々な意見を聞くことができて、意見交換できるような場はできないだろうか？」と。私には、対話・対話の場とは・ファシリテーションとは何かという課題に答えよ、という問いかけに聞こえました。私を含むコミュニケーション活動に関わっている者へのホットでクールな挑戦で、ファシリテーションの概念が有する多義性に躊躇しつつも、逃げるわけにはいかないと思いました。

そこで、大学の中で開催するとして、どのような枠組みが可能かと自問し、北大チームがよく用いた学習会付き熟議場スタイルを採用しました。プログラム第２部は、情報提供として、市民プロジェクトが主催する形で質疑応答を含んだ市民による報告会を行い、第３部は北大チームの主催で、第２部を受け、かつ広げて、参加者全員で課題を考えようと決めました。

6月17日に特定放射性廃棄物小委員会の第４回が開催されたものの審議は終了しなかったので、7月5日に市民プロジェクトさんと協議し8月9日に開催することになりました。しかし、市民プロジェクトも私もいったい誰に参加してもらいたいというのか。広く知ってもらいたいだけなのか。意見交換に力を入れたいのか。場を準備する人たち、ファシリテーター、参加者の間に漂う緊張関係を見過ごすことはできませんでしたので、科学コミュニケーションやリスクコミュニケーション、対話の実践や研究に携わったり、巻き込まれたり、関心を持っている方を中心に参加を募ることにしました。

急遽ということなので、会場を選択する余地などはなく、新型コロナの急増もあり、安全を考慮し、ここになりました。そんなわけで皆様は、この広すぎる空間で、固定の席に座っているのです。どうか皆さま、時間を取りますので、身を捩って後ろを向いたり、お目当ての人のところに歩いて行くなどして語ってください。第３部は、その後で、短歌や俳句などでお馴染みの連歌や連句のように言葉をつなげます。

本日、結果として参加者が互いに生み出すであろうものが、少しでも共鳴し合うなら、どんなにか良いことでしょう。この場は、主催者だけが対話の果実を摘み取るといったものではなく、会場に来られた皆様と共に、果実が実るよう世話をして共に味わう場です。

さて、参加者の7つの心得を述べて主旨説明を終わります。

以上です。

【お願い事項】

※ 新聞社等メディアの皆様へのお願い

- 会議の進行を妨げないような取材をお願いいたします。
- 写真および動画撮影されたくない人への配慮をお願いします。

※ 参加の皆様へのお願い

- 写真・動画撮影されたくない方はお申し出ください。目印になるものをお渡しします。
- 写真撮影や録音は許可しますがYouTubeやSNSへのアップはしないでください。
- 記録のために主催側では録画と録音をいたしますのでお許しください。簡易報告書の作成に使わせていただきます。
- 発言者が特定されないよう十分配慮し、論文の執筆に使わせていただく場合もありますので、あわせてお許しください。なお、関係する方の許諾を頂いてから行います。
- ホワイエに麦茶等を用意いたしましたが、冷たい飲み物は一階の自販機をご利用ください。
- 講堂内での本格的な飲食はご遠慮ください（飲み物や飴などは大丈夫です）。